

---

# マジチートって言うジケン越えてる

ベルム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジチートって言つジゲン越えてる

### 【Z-コード】

Z5775T

### 【作者名】

ベルム

### 【あらすじ】

いつもどおり家に帰って、いつもどおりオンラインゲームやっていつもどおりねたら、そこは知らない空間だった。チート、最強、原作ブレイク、三拍子そろった物語にする予定です。俺Tueeeeee!

やこつち系が嫌いな人は見ないでください。これは作者による「都合主義がたぶん・・・いや、かなりあると思うんで暖かい目で見守つてください。駄文ですがよろしくお願ひします。

Prat1・死んで・・・・無いよね・・・・? (前書き)

どうも、はじめまして

あほの作者です

黙文ですが、温かく見守ってくれるといいですね。

## Prat1：死んで・・・無いよね・・・？

突然だが、みんなに一言言いたい・・・。

「俺は、死んで、ないつ！！」

なぜこんなことを行つているかといつと・・・

### - 回想 -

「はあ、今日もはずれか・・・」

俺はそんなことを言いながら

イスの背もたれに体重を預けた。

現在、俺は家族ですら簡単に入つてこれない部屋  
つまり、My Roomにいる。

「くつそー、これで5回連続補助アイテムだー・・・」

知つてゐる人は少ないとと思うが

『Got of People』失われた神器』  
というオンラインゲームをやつてゐる。

そのなかに

課金して、がちゃと呼ばれるものをまわし、アイテムを手に入れる  
ものがある。

基本は武器が出てきて

運が良ければ神器が出てくる。

だが、ここ数日俺は補助アイテム

つまり『あたつたのはいいけど結局使わないでサービス終了になる』  
しか当たつていない。

「はあ・・・最近ついてないな・・・」

そう、今彼は絶賛不運中なのである。

道を歩けば、前の人頭に花瓶が落ちてしまふ  
交差点に入ると子供が飛び出して

裏道を通りと女の子が連れ込まれている  
と、なんともいえない場面に直面するのであった。

そして、彼は

所謂『お人好しへじ』（無自覚）

なのである。

降ってきた花瓶を受け止め

飛び出した子供」と歩道に転がり

不良たちを一刀両断

と、ヒーローさながらの出で立ちである。

「・・・今日はもう寝るか」

今は3時47分

もう少しで朝日が昇める時間帯である。

こんな時間までオンラインゲームをやっている彼は  
所謂「オタク」であった。それも重度の。

彼にとつては睡眠時間4時間は良くあることなので

特に気にせず布団にもぐりこんだ。

- 想終了 -

と、いうわけで最初の発言に戻るわけだが、

「まじなんなの」「？」

俺の目の前には、真っ白な空間が広がっていた。

俺は「あれ？もしかして気がつかないうちに俺死んだの？」

とか思いながら、とりあえずそちらへんを歩いてみると、そこには

「ちょっと待つよ~」

「うお？！」

・・・なんか変な幼女様が

「私は（21）しゃなしよ」

「……リアクションが同じだよ」

「このお幼女様俺の思考を読みやがった・・・だと・・・！？」  
「だから幼女じゃないって～」

「・・・お前は神か？」

卷之三

•  
•  
•  
m  
j  
k

「うん、まじめじゅう」

「あれあれ、どうしたの？」

「うん、まあそれは認める」

とそんなくたらないことを言ひてN君に云はれは、うらうら氣づけ。

「・・・つてことは、だ。俺は死んだのか?」

「ううん。しないよー」

いひなべおねこいひながんがんが良くある轉生物の出力

「それはねー、あまりにもお人好しなあなたをー、私たちがー、転

「たかじなのは、いざいにかかわらぬやうだよ。」

まあ、いまさらな感じがするが仕方ない。

とりあえず優先事項から聞いていいでみよう。

「実れるよ」

「 そ う な の か ？」

「うん。でも、戻ると」あらから干渉しない限りもう二回はこれ  
ないけどねー」

どうやら俺は戻れるらしい。

とりあえず遣り残したことは心配しなくてもよむかせつだ。

ふむ、だたつらとくに質問は

「あー、俺つてどこに転生すんだ?」

「それは行つてからのお楽しみー」

・・・なんかものすごく不安になつてきた。

知らない世界に飛ばされたらどうしよう。

とりあえずアニメの知識はそれなりにある。

小説も何とかカバーできる。

最近は「ハイスールD×D」にはまつてゐる。

「じゃあ、今からあなたの経験から引けるくじを選びまーす

「くじ?」

「てけてけてーん!」

無視された・・・。

「おお! 神級チート4つ、究極級チート1つひけまーす

「神? 究極?」

「さあ、それではどうでなにをひきますかー?」

「もう、いいです・・・。」

「ああ、くそつ…じゃあ、その神級つてので『身体能力』!」

「はいはーい、じゃあ、ひきまーす」

お前が引くんかいつ!

「てけてけてーん!・・・・『哀潤の10倍』だつてー?なにこれー? すごいのー?」

「哀川さんキタ

／

「あう?!

ちよ　ｗｗおま　ｗｗ

哀川さんつてだけでチートなのにその10倍つて・・・。  
なにこれ恐い・・・。  
まじ鬼畜だ・・・。

／(。。.)

なんかこれから俺が倒すであろう敵がかわいそうになつてきた・・・

いやだ

人類最強ですよ？

「……………」

記憶能力と空間を操れる程度の能力を差し上げます』だってー。す  
・・・んー?なんかついてるー!えーと・・・『副賞として完全

二二一

۱۰۷

「じゃあ、次いつてみよ!!

「えー、と、じゃあ、究極級の『顔』で！」

「アムーなになにー? カテル君サセバスチヤンも真二書なイケメンにはやがわり! これであなたにもモテキ到来間違いなし! 」 だつて! よかつたなー

「ううまあまーい！」

え？ なにそれ？

俺が知ってる中でも1位2位争うほどのイケメンせん。  
マジ俺どうなんの？

。那時，我還沒有開始寫詩，我所寫的詩，都是我所讀的詩。

「じゃあ、神級で『能力』三つおねがいしやす」

かでんて!! よし!! 君に決めた!!

りとあらゆる魔眼（何度も使つても失明しないし頭痛なし）とセイク

リット・ギア全部（熟練度は最大で、多重発動可）と金知全能（何

……あー？ どうしたの？ なんか鬼が半分ぬけてるや？

「いやー、なんといいますか。ある程度最初の一いつでやばいので

んだるーなーと思つてたけど、『『まだ鬼畜過激じゃがに・・・  
ねえ？』

も「マジ鬼畜

マジ吉だね

これはないわ。・jk。

「というわけでー、使い方とかはー、かつてにながれてくるとおも  
うんでー、とりあえずがんばってきてねー？」

「なぜ疑問系！？」

「じゃあーねー」

「え、ちよ、まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあ  
・・・

「

そうして

下沼凌矢の無双の物語は幕を開けたのであつた・・・。

Prat1：死んで・・・無いよね・・・？（後書き）

自分で読んでて  
「これはひどい」  
つて久しぶりに思いました^ ^

Prat2・…といふえす、状況を…・・・(前書き)

2話目です

相変わらず暴走で駄文です

Prat2・・・といえず、状況を・・・

「いいは・・・

「いいですか――――――――――――――

まあ、といえず現状を整理してみよう。  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・廃屋（なんか血なまぐせ）

・預金通帳（パスワード・カード付）

・キャッシュカード

・なんか黒いカード

・紙（なんか怪しい）

・・・うん、といえず「んなといふか。

紙がなんだか怪しいんで、といえずあけてみましょ。

『ハロー、これを一呼んで一ころつて――とは――といえず――無事

つてーことだねー

「え、麻先輩？・・・は、置いといて、続き続き」と

突っ込みたいところはほかにもあつたが

語が進まなしかどうかと、いあえず続きを読もう。

「これからあなたはこの世界で生きていってね」

・・・ふう、まあ、いつか。

細かい」とは「気にしない」—「休み

「…ん？まだ続きがあるぞ？なんか嫌な予感が…」

あ、そうそう。セウスちゃんかね!『これじゃ、たんなくね?』とか一言つてーいたんでー次のーものをー追加しといたよー』

・お金（金額は見てからのお楽しみ）

## ・裏会力ード

- ・見稽古（一度見ただけで秘奥儀まで修得可 複することで雰囲氣で修得可に） 想影真心の能力と重

・氣を操れる程度（ドラゴンボール参照）

— . . . —

もはや何でもありますね。

いな。ハツハツハ・・・。

俺これからどうぞいいんでしょそれ

〇〇』とか書いてあるし・・・。つか、会員俺一人だけかっ！見稽古とかどこの病弱少女だよつ、て感じだな。

氣を操るのは・・・  
うん？あつれー？なんか意外と普通に思える私は精神科に行つたほうがよろしいのでしょうか。

本気でそんなことを考えている今日この頃でした。

・・・ま、まあ現実逃避はこのへりにしこじて。  
「わざわざ、お金はどのへりにあ・・・る・・・」

『5・999・999・999・999・002』

・・・「ハハハシ

『5・999・999・999・999・002』

5999兆！？

約6000兆じやねーか！  
つかなんだよこの『2円』！  
なんで『2円』なんだよ！

『ああ、それはねーちょうど特売でー998円でー買いたいものがーあつたんでー使つちゃいましたー？テヘッ』

テヘッ・・・じゃねーよ！  
何人の金使つてんだよー！

まあ、もうい物ですけどーーー！

ふう、なんかもう疲れた。

。ひ。せ。へ。廻。ひ。ま。そ。ひ。か。だ。ひ。か。廻。ひ。ま。

Z  
Z  
Z  
•  
•  
•  
○

Prat2…とりあえず、状況を…（後書き）

またとんでも設定が…

相変わらず駄文ですが

まだ続けさせてもらいます。

Part 3・Jingū、もしかして・・・（前書き）

じつも

今日一回目の更新です

相変わらずですが  
よんでもりひらくだとい

### Part 3・じゅうて、もしかして・・・

・・・はあ。

やつぱり

「寝て目覚めたら夢でした」  
的な展開はなかつたか・・・。  
よし、もう諦めよう！

今、俺にできることを全力でやろう。

・・・と、言うわけで

今俺は外の探索に来ている。

現在の時刻 4時32分。

まだ早い時間だが

どこからともなく殺氣が当たれられている。

・・・ちなみに、今の俺の外見は3歳だ。

3歳。でも人類最強。ココ重要。

さてココで能力の説明を少し。

やはりというべきか能力は俺の任意でON・OFFできるようだ。  
それに、あまり力を出し過ぎないよう『身体能力』が10段階に  
分けてリミッターがかけられていた。『能力』のほうは特に制限が  
ないらしい。ためしに『身体能力』のリミッターをかけたまんまで  
ジャンプしてみたところ、50cmぐらいとんだ。よもや、素でこ  
んだけいくとは・・・。

まあ、いつか。じゃあ、今はこのくらいで。

・・・さつきから思つてることを整理してみよう。

まず、血なまぐさい。これはもう戦場といつていいほどにおいだ。あちらこちらに血痕がある。それから殺氣から何回かかつて人であつたであろう物も映つている。だが、吐き気などはない。さすが人類最強というべきか精神力も並ではない。それどころかさつきから若干殺人衝動が・・・。零崎は発動しねーぞ、つと。

次に、建つているものほぼすべてが半壊で側面にはツタがまかれている。どうしたらこうなるのか?つてほどの壊れ方をしている建物もある。

この時点でもう自分がどこの世界に飛ばされたかわかつてた。

そう、『』は

『暁の護衛』

の世界だ。さすがに『』まで来れば嫌でも認めざるを得ない。

しかも、だ。俺が昨日田が覚めたとこりい今時分が見てる景色といい原作中の

『禁止区域』

と、ひつじょーによく似ていた。

ということは、昨日俺は無用心なままねたといふことか・・・。今になつて寒気がする。

「・・・とりあえず今は原作中なのがそれとも以前なのが知るまうが先だな」

とりあえず俺は、原作中で主人公（海斗）が使つていたアパートを調べてみるとこした。

「たしか、ここに辺に・・・お、あつたあつた」

しばらく歩いていると、ひときわ大きな建物の前にたどり着いた。外からでもわかるほど殺氣に満ちている。内心ものすごくビビッて

いるんだが、震えとかはない。さすがチートボディー。

「…………ん？ あれは柏と…………須藤…………っ……！」

くそっ！ いきなり嫌なやつを見ちまつた。須藤は俺が嫌いな男性キヤラクターランキング2位だ。ちなみに、1位は当然のじとく中里亮である。

「…………まじよ？ 今あいつがココに来るの？ ひとせ…………まさか……！」

確かに百合？ って言つたかな。原作で、海斗の母さんが犯された挙句殺されるという最悪な展開があった。たぶん、今俺はそのシーンに出てくわしていると思われる。須藤が嫌いになつた理由がこれなんで、今から須藤をぬつ殺そうと思つ。拒否権は無しだ。これはもう決定事項だ。

「そうと決まつたら早速行動開始だ」

Side・須藤

ククク、今から俺は憎きあいつの“妻”を犯そうとあいつの隠れ家に向かつてゐる。一目見ただけでわかつた。こいつあ、上物だ、とな。ククク、さつきから笑いがとまんねーな。さて、そろそろ到着だ。犯して陵辱して鳴かせて殺してやる。ククク、“あいつ”的憎悪で固まつたかをが思い浮かんでくるぜ。クククククククク……。

俺はいま“あいつ”的の家の前に来ている。今から樂しいことが始ま

「やつとつこいたぜ」

る。

俺は、戸を蹴破り侵入した。

「動くな、殺すぞ？」

「つー？」

ククク、驚いてやがる。お？ ガキがいやがるぜ。だが、そんなことかんけーねー。どうせ最後には一人とも動かなくなるんだからな。

「今からお前を犯して陵辱して鳴かせて」

「殺してやる、か？」

『つーーーーーーーー』

突然放たれた強烈な殺氣に

その場にいた全員が固まつた。

Side：凌矢

いやはや、さすがに心が広くて温厚で尚且つ優しい俺でもさすがに我慢の限界ですよ。

まず、あの嘗め回すような目。今すぐつぶしたくなる。

あと、あのムカつく顔。今すぐコンクリートに埋めてやりたくなる。そして、あの声。聞いただけで、四肢を切り裂き、のどを少しづつ、抉る様にして十分苦痛を味あわせた後、内臓をぶち撒かせながら殺したくなつた。

だから俺は

「“ 投影、開始（トレース・オン）” 」

そういうて、手に『干将・莫耶』を投影した。もともと、この名前はこれを製作した夫婦の名前だとされ、『夫婦剣』として有名であ

る。『干将』（本来は『干將』）は陽剣（雄剣）、『莫耶』（あるいは『莫邪』）は陰剣（雌剣）とされている。だが、今俺が投影した『干将・莫耶』は、現物をはるかに超える。売り文句が『ミスリルでもアダマンタイトでも何でもござれ！』この剣に切れぬものは何もない！』てながんじだ。もちろん刃こぼれもしない。ランクだけならAと表してもいい切れ味だ。

ちなみに今俺は、空間を操作して他の人から俺の姿が一切認識できないようにして、声帯模写で「立木文彦」さんの声にしてある。その状態で声だけ聞こえたのである。つまり『声だけが聞こえる』というわけだ。こっちから殺氣を飛ばしたり、声をかけることはできるが、相手からしてみれば、姿もなく気配もなくただ殺氣が突き刺さり声が聞こえる、となんともカオスな状況である。

「つーだ、だれだ！？」

・・・やば、もう限界だわ。

もうだめ。

抑制できない。

人には本来『殺戮本能』と『抑制本能』がある。

今俺は

完全に『抑制本能』が消え

後には強大な『殺戮本能』がのこつた。

「黙れ。口を開くな。今すぐあの世に送つてやる」

そう言つて、俺は須藤に切りかかつた。

「ぐつ、あああああああーくつそおがつー！」

「ついて来れるか」

まず、はじめに左腕を奪つてやつた。須藤はついでにその場で回し蹴りを繰り出したが、今の俺は身長が八〇〇三ぐらくなので当たらぬ。というか、当てれない。

俺はその場から瞬歩さながらな動きで須藤の背後に回って、足を切りつけた。

「うがああああああああーぐああーはあ・・・はあ・・・」

右足を『切断』し、そのまま左足にとっさに作り出した刃渡り30センチのダガーを左足に突き刺した。

これで、じいつはもう、逃げられなくなつた。

ツターははずしていない。  
――までの所要時間は約7秒だ  
せなみにまた・身体能力』のリミ

「つ・・・はあ・・・はあ・・・。貴様は誰だ?なぜ俺に攻撃する

「・・・ムカついたから。ただそれだけだ」「んのやろうがっ！」

須藤が俺のいる位置とは逆の方向に拳を振るつ。などやつても無駄な二ば。

せで、せに殺されが、なんせにしよが

「もう終わりだ……。理想を抱いて溺死しろ！」

そう言つて俺は須藤の首を飛ばした。見事にとんだ首は柏の足元に音を立てて不時着した。それを見て柏は逃げ出そうとした。

「待て」

「つー？」

俺のその一言で柏は逃げるのをやめた。  
そうだ、柏には原作通り海斗についていつてもらわなければならぬ  
いしな。

「お前は、いま、」こいつこいつこいつてつみもない人を殺そうとした  
「？」

「今、この人が死んだら、その赤ん坊はどうなる？誰が養う？誰が  
面倒を見る？お前はそこまで考えて行動していたか？」

「・・・」

「今のお前は、人形と同じだ。いわれたことをやる、ただそれだけ。  
まったくもつて馬鹿馬鹿しい」

「つ・・・！」

「どうやら今気づいたみたいだな。だつたら、お前はこれからどんな  
行動をすればいいか、どうやって罪を償うか考えて考えて考えた  
先に思いついた行動を実行しろ。それがお前の、お前なりの償いだ  
「わ、わたしは・・・わたしは・・・」

そう言つて柏はその場に崩れた。ふう、これで何とか大丈夫だろう。  
そう想い、今度は百合がひのほうを向いた。もちろん空闇操作を  
やめて、声も元に戻して。

「怪我はありませんか？」

「え？・・・あ、はい」

「そうですか」

「あの、あなたは？」

「え？ああ、まだ名乗つていませんでしたね。俺は下沼凌矢。3

歳です。あなたは？」

「3歳！・・・え？あ、はい。私はか・・・朝霧百合です。」

そしてこの子が海斗といいます

ふむ、やはり予想通り。これで最悪の展開は避けられた。あとは、雅樹が来るのを待つ

「貴様は誰だ」

その言葉と同時にけりが背後から飛んできた。俺はとっさに前に転がり臨戦態勢をとった。

「須藤の死体……これをやったのはお前か？」

「ちよ、ま、待て！」

「……待つつもりはない」

再び蹴りが飛んできた。俺はバックステップでそのけりを避けた。  
さ、さすが雅樹。伊達に、天才の名をほいままにしてないな……。

「ま、雅樹さん！ 待つてください！」

「……どうした？」

雅樹は俺に目を向けたまま、百合の声に返答した。

「その子は、私を助けてくれました。ですから、戦う必要はありません」

百合はそう言って、俺と雅樹に笑顔を向けた。

「……どうしてんだ？」

せん

百合の発言に疑問の念を籠めて、問いただした。

「……の……ひどが私を犯そつとした時に、その子が来て、その……  
・・須藤さん？を殺したんです

「それは本当か？」

「ああ、事実だ」

「……そうか。早とちりしてすまなかつた  
「いや、いいよ。どこも怪我してないし」

ふう、何とか雅樹の警戒を解くことができた。これでなんとか話を進められる。

### Part 3・ジョリで、もしかして・・・（後書き）

うわー

やつされました。

戦闘とか酷いねもう。

うひ、こんな駄文でも

読んでくれたらうれしいです。

できたら感想をください。

なんかおかしなところがあつたら指摘してくれたらうれしいです^\_^

でも、誹謗中傷はやめてください。  
お願いします。

どうも

4話目です

相変わらず構成がくそですが

あれから10年近くの時が過ぎた。

今俺は13歳。身長も170近くある。だんだん顔が完成されいく。

あの後、鏡を見たが、やはりまだ子供だつたためかっこいいよりもしきかわいいの方が強かつた。

そんな俺も10年という時の中で大分成長した。

能力云々は一通り使えた。やりすぎて、建物がひとつ崩壊したが・・・

・。まあ、過ぎたことはしようがない。

余談だが、どうやら俺には『神の左手』別名『ガンダールヴ』の万能バージョンが追加されていた。

初めて『干将・莫耶』を握ったときにはじつくり来たのはこのせいか、と後になつてわかった。その他にも娯楽のため、楽器に触つただけで使い方を理解し、引くことができた。絶対音感は前世からの引継ぎで初期能力で装備されていた。ためしにファゴットで『雲梯』を使つてみたら、壁に穴があいた。零崎曲識恐るべし・・・。他にも、『暴飲暴食』やら『操想術』を試してみたが、どれも問題なく発動。

「市井 馬」の能力を使おうとして、糸がないことが発覚した。

『王の財宝』の中を調べてみたら、一応あつたはあつたんだが・・・。いかせん、金ぴかだつた。さすがギルさん。いやさすがつすね。と、そんなこんなでどうしようと悩んでいたところに『投影できんかな?』と思い、面白半分でやつてみたところ成功した。しかも、細さがミクロの世界とか無茶な設定で投影したので『さすがに無理があるだろう』と思つてたので驚いた。このとき、『想像』しただけで『投影』できたので『これはもしかして・・・』と思い、変な形をした箱を『想像』して『投影』したところ成功した。たぶん『

投影『』と木場の『魔剣創造』とかいろんなセイクリッド・ギアとかが混じつて万能になつたのだろう。深く考へないようにしてそこで思考を切つた。

で、海斗は今年で10歳になる。

性格は原作通りで天邪鬼だが、雅樹との間は悪くない、むしろ良好といつていいほどだ。

5歳ぐらいのときから雅樹は原作通り、海斗を鍛えた。俺が傷を治せるとわかつたからなのか、原作以上に海斗をいじめていた。そこに、俺も加わったからさあ大変。海斗君は原作以上の化けもんになつた。まず、なぜか瞬動使える。ありえんよね。んで、眼力でひところせるんじゃない勝手ぐらいフレッシャーを半端なくだせる。まあ、雅樹や俺程じゃないが。百合は基本俺か雅樹がそばにいて、襲つてきたやつを返り討ちにしている。雅樹が海斗を鍛えるときは俺が家に残り、俺が鍛えるときは雅樹が家に残つた。柏も協力してくれている。

もちろん雅樹は、社会勉強という名の犯罪を海斗に教えていた。まあ、さすがに実践はしなかつた。おかげで俺がツキのフラグ回収せねばならなかつた。海斗とは一応合わせたが覚えているかどうかわからん。

そして、海斗は俺と雅樹の修行という名の虚めに耐え抜き、晴れて一人暮らしことにになつた。

その際、柏もこつそりついていついていたのは内緒である。

「凌矢。お前はこれからどうする?」

「ん?俺か?ん~、とりあえず影から海斗見守つてるわ

「そーゆー雅樹たちはどうすんの?」

「俺たちは人の少ないところでひつそり暮らそうと思つ

「そつか。じゃあ、俺もたまに顔出させてもらひつ」

「ああ」

「・・・そういうえば食料とかどうすんの?」

「そういうえばそうだな・・・」

「あ、じゃあ、俺持つていくから心配スンナ。遠慮とかいらん。断つても勝手においとくからな」

「・・・恩に着る」

「ああ、じゃあな」

そう言って俺も海斗の後を追った。1週間分の食料を残して。いやー、あの一人には幸せに生きてもらいたいものだ。の人たちの馴れ初めを知っているだけ尚更。ほんと、なんで認めないんだろうね。いいじやん別に護衛が対象者と恋に落ちても。そこらへん頭がかたいつつーかなんつーか。まあ、理屈はわかんないでもないが『本人達の意思を一番に考えるべきじゃねーか?』思想の俺にとつてはそんなもの紙ぐずに等しいものだ。

「さてさて、海斗君はまだここ・・・」

ビビビツ!

俺の原作キャラセンサーが反応してるのでー!

とりあえずそこいらへんの捜索してると、海斗と赤髪の少女を見つけた。

顔を見てすぐわかった。あれは杏子だ。やっぱかわいいな。

そんなこと思いながら観察を続ける。

あ、杏子が海斗についていった。つことは助けた後か。

ちなみに海斗は“アキラ”(別名・中里亮)にあつたらしく、そん時俺はあいにく家にいた。帰ってきた海斗からその話を聞いたとき、無意識に殺気が漏れていたらしく、その場にいた人が固まつた

そうだ。

「そうそう、やつらの話の続きをなるが、食料とかも『投影できるのかなー』と思つてやつたけど無理だった。仕方ないのでありつたけの食料を時間の経過しない空間で作った『倉庫』に入れておいた。金がありすぎて困るとは思わなかつたけどなつ！」

まあ、そんなこんなで平和（？）な日常を過ごしていた。

「とつあえずは、海斗が死なないよう見守つておくれか

そつ言つて俺はやばいやつは海斗に近づく前に片つ端から潰した。偶に見過じすやつがいたが、さすがといつべきか、海斗はやられるどじゆか返り討ちにしていた。『もう、俺がいる意味なくね？』とか思つたが、とつあえず見守り続けた。

## Part 4・あれから・・・（後書き）

今日は短いです  
すいません

なんか無茶苦茶ごいの話ではないですね  
つながってないようなところあるし・・・

まあ、そこは、後々直しますんで今は勘弁してください  
お願いします

## Part 5・強敵襲来！！（前書き）

5話目です

相変わらず醜いですが

読んでやってください

あれからもう1年たつた  
え？

展開早くね？

うつせ

いいんだよ、何もなかつたんだから

いや、あつたか・・・。

海斗がね、襲いに来たやつをね、ことごとく血祭りに上げてたわ。  
さすがに俺もあれば引いたわ。

なんだつけ？七刀刑？だつけかな。

あれ、グロ過ぎでしょ・・・。なんか吐き気してきたよ。  
どこの中国の処刑方法だよ！、って思ったね。

・・・あれ中国だつけ？

まあ、いつか。

まあ、そんなわけでもう俺が要らなくなつたわけですよ。  
佐竹登場まだ少なくとも3年ぐらいはあるわけだし。  
どーつすかなあ。・・・あ。いいこと思いついた。

ほら、俺つてさ？転生する前オンラインゲームでそれなりに有名な  
プレイヤーだつたわけよ。んで、この状態でやつたらどうなるのか  
なー、なんてこと考えたわけですよ。いや、ぜんぜん『もしかした  
ら無双できつかも』とか思つてないよ？ホンとだよ？

と、いうわけでやつてまいりました。ネカフエ。

イヤー、久しぶりだねえ。何年ぶりだろ？前世で最後に入ったのが  
15ぐらいだから16年ぶりぐらい？つか、この世界にネカフエあ

つたのびっくりだわ。てっきりもうなくなってるかと思つたよ。よし、早速金払つてやるつか。あいにく金なら腐るほどある。ついでにさつき50万ほどおろしてきたつてもまだ5999兆9999億から動かないわけで……。」うなつたら田につぱに課金してやるう……。

「すいません。ちょっと、いいですかー？」

「はい、なんでしょう」

「利用したいんですけどー」

「じゃあ、こちらの中からコースを選んでください」

「んじや、7日間宿泊で

「……わかりました」

何その間？俺らんとこひでは結構普通だつたけどな。やつぱつこいつだとちょっと……いや、かなりやばかったりするのかな？この時間は。

まあ、そんなこと気にして仕方がないか。ちつちつこことは気にしない。これぞ凌矢クオリティー。……なんか違う気もするが気にはしない。

「2400円の7日分なので16800円になります

「はいはいー」

「……20000円お預かりいたします。3200円のおかえしになります

「あ、ども」

めんべくこんで2000円出したやつた。てへつ

・・・ええ、わかつてますよ。今のは気持ち悪かつたつて。だからね、それだけは勘弁してください。いや、マジで！すいません！ほ

んとに勘弁してやれ……あ、こや、ま、ひみ、あ、や、ま、アア  
アアア——————。

ふう、何とか帰つてこれた。マジ死ぬかと思つたぜ。そんなことほ  
かしておき、早速はじめますか。さてまずは何を……。

「これつて……彩が海斗に勧めてたやつじや……？」

そう、何を勧め……これは、海斗に彩が勧めてたゲームなのである。  
いやー、まあかこんな昔からあるとはねー。それにこれ一週間位前  
に始まつたばかりらしいし。ま、たすがにこんな早くからいるわき  
やないよね。……いないよね?

「ま、まあ、とつあえず登録してやるとしますか」

んでやりはじめたわけだが。

「キャラクターメイキング細か過ぎだろつ! なかなか決まねーわ! …  
・・・そうだ! 海斗みたいに特定の人物に似せてやれば、或いは・・・

」

うん、そうしよう! だれにしようかなー。やっぱ某『蛇』さんこ  
しますか? そうだよね! よしそうと決まつたら作るぞー! テンショ  
ン上がつてきたーー!

せ、やつとてきたぜー・・・。かなり細かい部分まで再現されてん  
じゅね? せば、早くやつてー。よし、オープニングも終わつたし名

30分後

前は……『ベルム』にしようと。特に理由はない。チユートリアルは……要らんよね。丘間は一見にしかず。……なんか間違ってるようなきがするが『気にしない』。

「おー、よつと決まつたら一般の部屋に入つて……戦闘開始だ！」

『よひ』

「はー、よひー」

『がんばつましょ』

「そうですねー」

『初心者ですか？』

「そうですが何か？」

『わかんないことあつたら、聞つてくださいね』

『親切にじづもあつがとつ』れこますー』

と、いひことで会戦しました。よーーー、やあああつしやるやーーー！

『ルイ・フィーリーさんが倒されました』

「はやつ」

『のぶよし様さんが倒されました』

『語田わつーな・・・』

『こやん、ばかーんさん』が倒されました

『勝手に倒されてろつー！』

・・・おかしい。まだ開始2分もたつてないぞ？いくらなんでも早すぎる。それに、この三人は同じ方向に進んでいたから、たぶん同じプレイヤーに倒されたと予想される。いつたいどんなやつなんだ。興味がわいてきたな。

「あ、敵発見。よし、ナイフでやつてみつか」

おれは、ナイフ片手に突っ込んだ。敵もそれに気づき発砲してくる。だが甘いな。撃つた瞬間に左右によければ当たりはしない。生憎、こちとら反射神経とかは半端ねーんだよ。しかも、火力の速度も尋常じゃない。

「おひおひ。動搖してやがんな」

敵はどうとう乱射してきた。だが、狙いの定まらない射撃ほど恐くないものはない。懐に入り、一気に首を搔つ切る。

『ベルムさんが敵を倒しました』

おし、一人目。お次は・・・お?三人一緒に!よし、だつたら俺の十八番の『ハンドがんでヘッドShot!!作戦』開始だ。そう考えて、武器をナイフからグロッグ19に持ち替えた。

「おらおらおら!死神様のお通りだー!」

まず、ジャンプしてやつの頭に狙いを定め・・・Shot!!

『ベルムさんが敵を倒しました』

よし、1人目。仲間が死んだからなのか残りの2人が周囲お警戒し始めた。すぐに俺は見つかっただが、そのときすでに凌矢は動いていた。2人のうち右側にいたやつに接近していく。右側のやつは接近してくる俺に気がついて照準を合わせるが、ときすでに遅し。2人目も凌矢のグロッグ19の前に遭えなく沈んだ。

「ん~、グロッグも扱いやすいんだが、俺的にはやっぱリベレッタ

M92がいいな」

そんなことを考えながら3人目も葬つてやつた。

「セーつて、敵さんは・・・あいつ、できる・・・」

こつにむかつて来るやつが一人いる。だが、明らかにさつきのやつらとは違う雰囲気を持つてゐる。何でわかるかつて?んなもん感だ感。

「セーつて、どこまで俺を楽しませてくれるのかね」

Side:???

さつきから私たちのチームの人があてつけにやられてゐます。その中には、なかなか強いプレイヤーさんもふくまれていきました。

(「いつたい何が起きたのでしょうか?」)

そう思い、やられた人たちのいたほうに進んでいきます。そうしていふと、私のほうに敵さんが近づいてきました。どうやらランクを見る限り初心者您的です。

(外見が某『蛇』さんにそっくりなのは、この際突つ込まないようになります)

でも、この後、初心者だと思つてあなどつていた私は激しく後悔しました。

Side:凌矢

「まず手始めに・・・よつと」

相手に近づきながら牽制程度に A k - 47 を連射する。案の定敵は左によけて、建物の陰に隠れた。俺はすぐさま獲物をグロッグ19に切り替え、相手に気づかれないよう少し距離を置きながら近づいた。・・・ん? 何か黒いものが

「! ? 閃光弾かっ! ! くそつ」

俺はすぐさまその場から後ろに下がりながらグロッグ19を建物の陰があつた周辺に連射した。

「確かにこり辺にも陰があつたはず・・・つー・

残りライフルは・・・27か。大分削られたな。追つてこなかつたとこうを見ると、相手にも多少なりとダメージを与えたかもしれない。

「Jリーチは・・・手榴弾か・・・」

・・・ふふふ。この俺が昔何と呼ばれていたか? 『存知だらつか? 』  
ブラインド・エクスプロージョン』

簡単に言うと『死角から爆弾が!』みたいなもんだ。  
たぶん、相手もさつきの俺と同じように少し距離を置きながら来るはずだ。

「だつたらこの角度で・・・つー・」

手榴弾のピンを抜き、壁に向けて手榴弾を投げ反射で中央で爆発するよつにした。

どがーん

手応えはあった。だが、ログが流れてこない。

「まだか・・・」

とりあえずナイフに武器を替え、陰から出る。

「つと、アブね。・・・お?ナイフに切り替えやがった

ハンドガンで牽制してきたのを避け、相手との距離をつめる。敵もナイフに武器を替えた。俺とナイフで殺り合おうなんて、たいしたやつだ。

「じゃあ、本気で行くぜ!」

まず俺は、相手に近づき牽制程度に横に薙ぐ。敵は、バックステップでそれを避け、ナイフで突いてきた。俺はそれを左に避け、ナイフを横に薙いだ。一応、相手に当たつたが決定打にはならなかつたようだ。両者の間に静寂が訪れた。

「次で決める・・・!」

俺はそう思い、相手に“突き”をかました。  
その後ログが流れた。

『ベルムさんが敵を倒しました』

・・・ふう、何とか倒せたな。それにしてもきつかった。残りライフが2だ。もしあそこが突きだったら俺は確実にやられてたな。もうたたかいたくねーな。あいつとは・・・。

その後はあいつと鉢合わせすることも無く、順調に敵戦力を削つていき、ランキングでも一位に躍り出た。

・・・え？

そんなライフで死ななかつたのか？  
つて？

当たらなければモーマンタイ。

## Part 5・強敵襲来！！（後書き）

なんか結構要らない章になつた気が・・・

まあまあ、気にしないこよつてます、はい。

## Part 6・さつきの敵は次戦の友？（前書き）

6話目です

今回も変な感じですが

がんばります

## Part 6・さつきの敵は次戦の友？

『おつ』『おつかれー』『ん』『おつでしたー』  
「はい、おつー」

さつきの先頭で共闘した連中と軽い挨拶を交わす。

『それにしても、さつきはすごかつたですね～ベルムさん』  
「いえいえ、それほどでも、つと」

『そうそう 孤高の赤神 を一人で倒すなんて私たちではまず無理  
ですよねー』

「孤高の赤神 ？」

「はい。開戦当初からギルドに属さず、戦闘ランキングで1位ばっ  
かり獲得しているプレイヤーです」

「へえ～。そんな人さつきいましたっけ？」

『何言つてるんですか？さつき倒していただじやないですか。一人で  
「さつきつて・・・もしかしてあの化け物みたいに強かつた人です  
か？」

『ですです。まあ、ベルムさんも人のこといえないんですけどね  
「ははは、偶然ですよ」

ふむ・・・。さつき俺と互角に戦ったプレイヤーはなかなか有名な  
ようだ・・・。つてことは、だ。その有名なプレイヤーを倒したつ  
てことは、いろいろと田をつけられるかもしれないな。うーん、ど  
うしようかな・・・。

・・・あ、そうだ。自分でギルド作って誰も手を出させないようす  
すればいいんじゃね？・・・よし、これでいい。うつと決まれば  
早速・・・ん？

『フレンド申請待ち一覧』

「フレ申?誰からだらう?」

そつ思い詳細を見てみると、そこにはたつき激戦を繰り広げたプレイヤー名が記されていた。本文は短く

『お友達になつてください』

だけだった。それを見た俺は

「 もうです。よろしくお願ひします、つと」

とつあえずそつ返信しておくことにした。それに、承認ボタンを押すのも忘れない。よし、これで晴れと俺にもお友達第一号さんができたわけだ。しかも強い人。これから楽しくなるぞー。そんなことを考えていると、個人回線が入つた。

『ベルムさんへへ承認していただきありがとうございます。これからよろしくお願ひします。ところで、ベルムさんばどのギルドに入するか決めましたか?』

「ん?・・・はい、こちらへお願いします。ギルドは自分で建てるつもりです」

『そうなんですか。でしたら、一緒に作りませんか?』

・・・おおっ。これなりのトンでも発言へ一瞬脳がフリーズしてしまいましたで!」とこります。

・・・え?まだしゃべり方がおかしい、つて?・・・こまけえこたあいいんだよ。・・・すいません。少々取り乱しました。

それにしても、うへん、どうしようか？わたくしの戦いぶりからして、足を引っ張ることはないなをやがだしなあ～。・・・よし、決めたーー！の人と一緒にやるのも楽しそうだし、受けてみようかな？

「いづらはかまこませんが、自分なんかと組んでいいんですか？」  
『はいー私のほうこそ足を引っ張らないようにがんばりたいと思います』

・・・なんかこの子、ええ子やなあ～。・・・つとあぶないあぶない。また思考が飛ぶところだった。

「じゃあ、いづらでギルド建てますね」  
『あ、はい』

わたくし、ギルドを建てるやつで・・・

「あの～、つかぬ事をお聞きしますが、ギルドを建てるためには課金しなければならんのですか？」  
『あ、はい。そのようですね』  
「あ～、じゃあ、今から課金して行つてくるんで待つていて下せ～」  
『わかりました～』

そう言って俺はできるだけ早く課金できるように、早足で課金して行つた。まあ、早足つつても、一般の人の全速力みたいな速さだけだ。

## Part 6・さつきの敵は次戦の友？（後書き）

はい、今回も駄文です

なんか学校で書いていたら

変なことになつてしましました

すいません・・・orz

## Part 7・ギルド名は・・・(前書き)

7話目です。

だいぶ感想が荒れすぎましたが

そんなの気にしません。

というより、私の名前で殺人鬼さんの悪口言つた人は  
もう、感想とか書かないでください。

気分が悪くなります。

課金しようとして外に出たのはいいが、コンビニが見つからない。俺は、いつもコンビニからの経由で課金していた。それ以外の方法はまったく知らない。つか、コンビに経由以外の課金方法ってあるのか？それすらもわからん。

「うーん、どうだ？・・・おーあつたあつた」

やつと見つけた。でも、たぶんネカフュから「」まで2kmぐらいはあるぞ？俺だったから3分ほどでこなれたが・・・。とりあえず、わざわざ課金して戻るわ。

ウイーン

「こりゃしゃこませー」

お？「」のコンビニの定員さん結構愛想がいいねえ。俺の住んでいたところの近くのコンビニとか『つしゃいあせー』だつたぜ？もつとひどいときは挨拶すらしねえの。ま、いいけどね。俺は必要最低限の会話しかし無いタイプ・・・でもないか。

んじゃま、わざわざ課金を・・・して・・・。

「こりゃ課金すればいいんだ？」

そり、俺はいつたい何円課金したらいいんだろ？今手元には、48万と3200円ある。ここは景気良く2万円使つとしますか。うん、そうだね。ケチつて後悔はしたくないしね。金なら国家予算

よつはるかにある。つか、ありすぎだらうよ、どう考へても。  
・・・あとで難民救済募金とかに援助しようかな。

・・・うん、そうしよう。今、じうじてこる間にも困つてこる人は世界中にいるんだ。いき照る抱けども幸せと思わなきやな。

つとひ、なんかまた思考があらぬ方向に・・・。  
まずは課金しないと。えーっと、2万円2万円。

ウィーンウィーンウィーンウィーン ピコッ

よし、後はこれをレジまでもつていつて

「に、2万円になります」

「はい」

「は、はい、2万円ちよつとお預かりいたします。レシートはいりますか?」

「あ、はい」

・・・なんであんなにキヨドッてるんだ?那人。あ、俺が課金しようとしているからかな?ん~、でも、普通に課金の紙用意しているしなあ。・・・もしかして、俺の格好変だと思ったからかな?そりや、まだ5月なのにドクロのついたTシャツ着てればそう思つても仕方ないか。俺も思うもんね。『こいつ寒くねえの?』つて。まあ、俺は氣とかいりできるからぜん寒くないんだけどね。

ちなみにこの服も『投影』して作りました。いや~、『投影』って便利だねつーもつ、何でもできちやうーあ、食いもんは無理か。

とつあえず、早くネカフHに戻るわ。

数分後

・・・ソロモンよー私はかえってきたああああああああ『ゴホッゲホ  
ツブヘツ・・・。

慣れないことははやるもんじやないね、ホント。  
ホントは最後、のばすつもり無かつたんだけどなんとなぐのりでの  
ばしちまつた。

「ただ」

『おかえりなわ』

「は、じゃあ、かえります」

『ええ?ーそつちのお帰りなさいじや ありますよー?』

「冗談ですよ【冗談】

『むう・・・』

まあ、この人をいじるのもこのへりこへして、せつせと課金しねば。  
えーっと、確かこれをいつやつて・・・よし、こつた。

・・・おお、反映されてる。

じゃあ、まずギルドを立てて・・・あ。

「えーっと、ギルド名何にします?」

『あ、やうこえば決めてありませんでしたね』

「はー、やうなんです」

『じゃあ、ベルムさんが決めてください』

「うーんそういわれても・・・」

『じゃあ、私の通り名の一部とベルムさんの格好の元キャラを足し  
て【赤蛇】なんてどうでしょうか?』

「【赤蛇】・・・いいですね。それにしましょー!ー」

『はーいー!』

よーし、ギルド名決ました。えーと、後はギルド紹介文・・・は後でいいから、次。  
なになに?

『ギルド設立おめでとうございます。当ゲームでは毎に数回程度、ギルド対抗戦を開催する予定となつてあります。つきましては、その『』説明をさせていただきます。

1・戦闘に参加できる人数の上限は15名まで。（それ以下なら何人でもかまいません）

2・敵対ギルドは『』からで決めます。（抽選で決めたいと思います）

3・参加する場合は、ギルドメニューの『参戦』ボタンを押してください。

4・開催は事前に手紙でお知らせいたします。

以上で説明は終わらせています。では、『』武運を

ふむ・・・なかなか興味深いものを見たな。ちょっと話してみるか。

「ギルド同士で戦闘できることは知っていましたか?」

『はい、この間やつていました』

もつやつたのか。つてことは、もつじめいへはなれやつだな。

じゃあ、ポイントもまだ結構あるし何か買おつかな。

ふむふむSIG SG550にFAMAS F1。

・・・おおM24 SWSもある。

なかなかいろいろな種類のものがなん・・・だと・・・?

ベレッタM92・・・だと・・・?

まさかこんなところにあるとは・・・。しかも課金武器。それに、どうやらこのゲームにはギフト機能があるらしい。

・・・よし、決めた。

「えと、ベレッタM9もつてますか?」

『? いいえ、持つてませんけど・・・?』

「そうですか」

よし、じゃあ、ベレッタを2丁買つて片方を送つて・・・。

『なんかきました』

「開けてみてください」

『あ、ベレッタM92・・・』

「はい。それは、今日という日を祝つて僅かながら贈り物です。と、

いうよりこのギルドに入った人にもれなく渡すつもりです」

『そうですか。ありがとうございます^\_^』

「喜んでもらえて何よりです^\_^」

ふむ、これはいいかもしない。ギルド紹介に『ベレッタM92必須（こちらでくばります）』とでも書くか。うん、そうしよう。

こうして、俺は無事？ギルドを建てることができた。

なんかもう無理です。

文が思いつきません。

早く本編始まらせないと。

誹謗中傷の感想はおやめください。

哀れなだけなんでw

## Part 8：能力封印（前書き）

8話目です

100000P突破しました

ありがとうございます

ギルドを立ててから3年とちょっとたつた。

・・・え？

展開が早く？

き、気のせいや。別にギルド建てた後特に大きなイベントが無くて、書くことが何にも無かつたってわけじゃないんだからなつ……。はい、嘘です。ただめんどくさくなつて書きませんでした。すいません。だが後悔はしていない！無論、反省もしていない！謝つたけどね。

まあ、そんなわけでの口から順調にギルメンを増やしていき、今では最強ギルドとして有名になった。そして、俺にも一つ名がついたんだ。

### 【イリーガル・ダイセクト】

直訳すると『闇を切り裂く』って意味になる。なんでもベレッタM92で悪そうなプレイヤーを片つ端からやつつけてたときについた名前らしい。つか、正直、恥ずい。なにこれ？厨二全開ジャン。絶対つけたやつ面白がつてつけただろ・・・。くつそー、もつとかっこいい名前にしてほしかった。これ、本音。

ちなみに、ギルドメンバーには、加入した時点でもれなくベレッタM92をプレゼントしている。ギルド規則で『ハンドガンはベレッタM92だけ』と決めているので、みんなベレッタM92を装備し

て戦つてゐる。まあ、相手からしてみたらみんなベレッタを使っていて、さぞ奇妙な集団にうつつてることだらう。まあ、そんなの関係ないけどね。要は、強いか弱いかだ。俺とか幹部クラスになると、もう一騎当千ぢうの話じやないくらい強い。べつに、平のギルメンが弱いつて言つわけじゃない。俺たちが以上なのだ。

さて、話は変わるが海斗は今たぶん15歳になつただらう。となると、ここぞひとつのイベントが思い浮かぶ。

そう、佐竹が海斗に接触するあれだ。

原作では、雅樹は死んでいる設定になつていてから海斗が佐竹をボコッていたが、この場合はどうなるんだろうか？百合さんの病気は俺の氣を使った治療で治したから、原作では死んでいるはずの2人が生きている。海斗は、佐竹を雅樹に合わせるんだろうか？それとも嘘をついて追い返すのだろうか？ここら辺で海斗がボディガードになるかならないか決まると思つ。

・・・あれ？どうせじろ海斗は憐桜学園に行く氣がする。もしかしたらここはあまり気にしなくてもいい氣が・・・いや、一応見ておけ。

### 禁止区域

ココには週1、2のペースで来ているから、あまり変わつたようには思えない。・・・たぶん、俺の氣のせいだと思うが、この前来た時よりも氣の数が減つている。・・・あ。そういえば原作で『海斗が表の禁止区域一人で占めた』って誰か言つていたな。となると、この氣の少なさは海斗がやつたのかな？たぶんそうだな。雅樹がやるとも思えんしな。

ちなみに、雅樹と百合さんは相変わらずラブラブです。雅樹も原作と違つてかなり性格がまるくなつてゐし、百合さんもかなり優しいし。やっぱり百合さんを助けたのは正解だつたな。うんうん、やつぱつこうこう夫婦を見てるとこつちまで心が温かくなるな。

・・・ そういえば、皆さんには嘘をひとつ言いました。それは、『身体能力』についてです。前は『リミッターをかけているから全力を出せない』と申しましたが、正しくは『俺の力があまりにも弱過ぎてリミッターをはずせない』だけです。

・・・だつてさ『君はあまりにも弱過ぎて、リミッターは最大1つしかはずせない』とか言われたんですよ？そつから悔しくなつて必死に鍛錬して何とか今では3段階まで開放できるようになつたけど・・・最初言われたとき『俺、チートもらつた意味なくね？』と思つてマジ泣きしましたよ。

まだ、7段かも開放できるわけだし。でも、あれから一向に開放で  
きる気がしないんだよな・・・。ココが俺の限界なのかな?・・・  
たぶんそうだろうな。それ以外に考えられないしな。はあ、ホント  
俺つてなんなんでしょうね。神様からもらつた能力もまともに使え  
ない。そのくせ、一応最強。なんかこの半端加減がたまらないいや  
だ。

・・・よし、決めた。ほんどの能力封印しよう。さすがに『空間を操れる程度』とか『氣を操れる程度』とかは無理だけど・・・。そうだなあ。とりあえず、固有結界は『投影』以外使わないようしよう。もちろん『王の財宝』もだ。後は『聖母の微笑み』以外セ

イクリッヂ・ギアは使わないようにしてよ。『魔眼』とか『戯言シリーズの能力』とかは、何かと役に立ちそんなんで、主に補助的な意味で使うとしよう。『全知全能』とか『ガンダールヴ』は封印するとかそういう問題ではないので、そのまま。

ふう・・・。とりあえずこのくらいで良いだろ。もちろん『身体能力』も一段階までしか開放でないよ。これで大分制限がかかった・・・はずだ。これでもまだまだチート級とか超えているが、そこはもうビビりよつもないな。

ま、今日はいじぐりにして海斗の様子を見に行くとしますかね。たぶん、今日も杏子と一緒にやつてると思つが・・・。

そんなことを思いながら俺は海斗が住んでいる家に向かった。

## Part 8・能力封印（後書き）

短過ぎて・・・orz

カワウソさんにいろいろ指摘してもらいました。  
でも、私はどうにもできないところは  
ご都合主義発動ということで  
勘弁してください。

最近私は『Agape』をよく聽きます。

「Would you call me if you need  
my love?」  
つてね^ ^

いいきょくだなー

## Part 9・佐竹マジ厳つい・・・(前書き)

9話です

今回ついに佐竹を出します

デンドンダン

「お～い、海斗～。いるか～？」

シーン

俺は海斗の名前を呼びながら刀をたたいた。だが、返事がない。おつかしいな～？海斗の家ってココであつてるよな？俺の知らないうちに引っ越したとか・・・？ま、まさか、殺られたりとか・・・。まあ、そりやないだろうな。普通に考えて食料調達に行つたか散歩（狩り）に行つたかだな。

「う～ん、間が悪いな～、海斗は

・・・あ、この場合は俺が悪いのか？もしかして俺つて間が悪い？・・・たぶんそうだろうな。何かと昔から運が悪かつたし『これ絶対誰か仕組んだだろ』とか思う出来事も日常茶飯事だったし。そのおかげでいろんなことに対応できるようになつたのは、うれしい誤算だ。その分、苦労が絶えなかつたが。でも、こっちの世界に来てから、それがめつきり減つた。これも神様のおかげかな？・・・たぶんそうだろうな。こんなヤバイ『能力』をくれるぐらいだし、俺の運を操ることは赤子の手をひねるのより簡単かもしねない。

・・・知つてるか？赤子の手をひねるのって案外難しんだぜ？だつてさ。あんなちっちゃい生き物に手を上げるとか、主に精神的にかなりのダメージを被ることになる。まあ、そんなことも平然とやつ

てのける鬼畜もこの世の中にいることだらうがな。

・・・ちなみに俺は鬼畜じゃないぜ？

え？何その疑いのまなざし？

いや、マジで俺鬼畜じゃなし。いや、ひょ、やめ、待て、いや、待つてください。お願ひします！ホントマジでつ！ホント俺鬼畜じやないから！みんなに言いふらそうとかその考え方やめて！俺殺されうつうう。（主に社会的な意味で。・・・まあ、ぶつちやけこの世界に社会とか関係ないけどね）

・・・わ、おふぞけもこのくらいにして。  
さすがにいつ帰つてくるかわからないしな。今日のといひは雅樹たちのところに厄介に・・・あ。

今思つたんだが、海斗の氣探つてそこに行けばよくね？・・・物は試しだ。海斗の氣は、修行（といひ名の虜め）をしていたときに覚えたし、やつてみるか。まずは、精神を落ち着かせ俺の氣をあたりに撒き、一気に探る。・・・お？発見。いつから、東に100mぐらい行つたところにいるみたいだ。んで、もうひとつ俺の知らない氣があつた。

・・・あつれー？

もしかして佐竹きた？

この時期からして海斗に接触してくる人物はあいつぐらいしかいなはずだ。つか、タイミングよすぎね？・・・深くは考えないようにしてよ。考えるだけ無駄だしな。

よし！んじゃ、行きますか。

もううん海斗に見つからなによつにだけど。

さあて、やつてまいりました！今絶賛海斗と佐竹が交戦中です。さてどうしてこんなことになつたか簡単に説明すると

佐竹接触 「雅樹はどうしている？」 「なぜ親父の名を知っている？（怪しいやつだな。ハゲでサングラスかけてるし）」「友人だ」「嘘をつくな（とりあえず負かして本当のことをはかせるか）」

### 戦闘

とまあ、こんな感じだ。実際はもっと会話をしていたが、めんどくさいのでそこらへん省く。それにしても、海斗のやつ完全に遊んでるな。つか、佐竹もよく防いでるな。・・・あ、なんか海斗言つてる。『お前を認めてやる』だって。あのぐだりか・・・。つーと、佐竹がボコられるわけだが。また来るまで待つのめんどいから、とりあえずここいら辺でやめさせるから。

「そこまでだ、海斗」

「つー？誰・・・、って師匠か」

「・・・誰だ」

「だから凌矢で良いっていつも言つていいんだろ」

「いや、一応けじめはつけな」と思つてな

・・・やっぱり海斗ってかつこいよなあ。なんかこう、独特の雰囲気があるつーかオーラがあるつーか。そこに痺れる憧れるう！つか、佐竹が困つてゐ

「まあ、いいか。それと、その男 佐竹明敏は雅樹の“元”友

人だ」

「・・・“元”」

「ああ、今はどうかわからない、っていう意味でだがな」

「ふうん」

「……なぜ俺の名前を知っている?」

「ん? ああ、それは俺だからだ」

・・・ははは。『何言つてんだこいつ』的な視線を佐竹から感じる。まあ、俺もそんなこと言われたらそう思つわな。まあ、それは良いとして、俺はぶつちやけ佐竹を雅樹たちに会わせることにした。そこで何が起ころるかは俺も予想できない。

「そんなことより、お前、雅樹に会いに来たんだろ?」

「・・・そうだ」

「んじや、ついて来い。・・・海斗。お前もだ」

そう言つて俺は歩き出した。海斗は『俺関係無いよな?』みたいな顔して帰ろうとしたので、一緒に来るよう促す。渋々、という表情だったが、どうやら素直についてくるらしい。佐竹はいまだに疑いの視線を向けてくるが、俺が気にせず歩き出したからなのか、数歩後ろからついてくる気配がある。んじや、いきますか

### 雅樹夫妻の家

「久しぶりだな、雅樹」

「・・・佐竹」

入つて早々佐竹が雅樹に声をかけた。どうやら雅樹も無表情だが驚いているようだ。・・・ん? なんで無表情なのにわかつたかつて? それはな、一瞬眉毛が『ピクッ』つてなつたんだよ『ピクッ』つて。

まあ、そんなわけで少し険悪なムードになりつつある。しかし、そんな一人の間に割つてはいる勇者が

「お久しぶりね、佐竹さん」

「・・・神田川嬢」

「“朝霧”です」

・・・はつきり言おひ。『朝霧』といつたときの百合さんほものす  
ごく怖かった。雅樹ですら引くぐらいた・・・俺が、氣を使って  
病弱を直してから、こんな感じだ。俺も、ここまですごい威圧感を  
持っているとは思わなかつた。海斗も、なんか汗かいてる。そういう  
う俺も・・・（汗）

「といひで、雅樹さんに何か用でも？・・・それとも私かしら？」

「・・・いえ・・・雅樹に少し」

おおう、佐竹が引いているwwwこれは面白いww

ま、まあ、冗談はこのへりにして

「佐竹。俺になんのよつだ？」

「あ、ああ、それは」

そう言つてなんか話し始めた。雅樹は目を瞑りながら険しい顔をして  
いる。まあ、話が話しだしな。

そんなこんなで、佐竹が『話は済んだ』みたいな顔をしてひと段落  
着いた。あれ？海斗のことは？

「・・・これはあくまでも提案なんだが

「なんだ？」

「海斗を私に預けてくれないか？」

「どういう意味だ？」

佐竹はそこで自分が学校の校長をやつてこること、それは憐桜学園であること、そこには海斗を入学させたいということを話した。

「ふむ・・・」

「どうだ?」

「二つ条件がある」

そう言つて雅樹は経歷に自分たちの名前を載せないこと、学費を佐竹のほうで持つこと、海斗の願いは極力聞き入れることなどを条件にした。

「わかった。その条件を飲もう」

「交渉成立だ」

「・・・まで、俺の意思はどうなる?」

今までずっと黙っていた海斗が不機嫌そつと口を開いた。まあ、そりやそうだわな。勝手に自分のことを決められたら俺でもそうなるわ。

「そんなもの

「最初から」

『ない』

「・・・」

まさかのコンビプレー発動! これには海斗も唖然としている。かくいう俺も開いた口がふさがらない。まさか雅樹と佐竹がこんなネタにはじめうとは・・・。原作のキャラ崩壊もいいところだな。まあ、

「ほんと俺のせいだと想つが。

「それにこれはお前のためでもある」

「・・・ツチ。わかった」

海斗はいかにも『めんどくさい』といつ顔で承諾した。よしといひ邊で

「じゃあ、俺も行こうかな」

『え?』

何その変なものでも見たような顔は。しかも百八十まで・・・。  
軽傷ついたわ。

「まあ、経歴云々は書けないが、金ならあるだ?」

『え?』

だから何その顔。いや、銀行強盗とかしてませんよ、いや、マジで。皆さんわかるでしょ?このどついたらいかわからなにほど莫大な財産を。ええ、だから銀行同等とか百害あって一利なしなわけですよ。

「佐竹。わかったな

「・・・わかった」

「うじて俺も憐桜学園に通えるよくなつた。

・・・え?展開が早い?  
そこりへんは気にしないで。  
ご都合主義発動だから。

どういう意味かつて?  
俺もわからん!

Part 9・佐竹マジ厳つい・・・（後書き）

キャラ崩壊がひどいwww

しかもかなり無理やり過ぎる

何でそこらへんは軽く受け流していくべきでそこ

おねがいします。

すいません

投稿が大分遅くなりました

ちょっと風邪気味です

せきが止まりません。

憐桜学園入学式

「ついにやつてきたわけだが・・・」

「・・・ああ」

『・・・無駄にでかいなあ』

そんな感想を俺と海斗は同時に漏らした。実際、敷地面積やらはかなりでかい。たぶん一軒家が50くらいは入ると思つ。いや、マジで。こんなことで嘘ついても仕方がないんで正直に言つておく。施設とかもあわせたらもつと良くかもな。

まあ、そんな感じで少しの間ほつけていたわけだが、そこであつた問題が

「お前たち、校門の前で何をやつている。邪魔だ」

はい、みんな大好きソントク君です。

・・・まさかこんなしおばな「おい、聞いているのか?」から遭うとは思つていなかつた。つか、やつぱり「貴様ら、この僕を無視するつもりか!?」ソンはなんか不機嫌そうだな。何で不機嫌なんだろうな?・・・まあ、そんな「僕を誰だか知つてそんな態度をとつているのか!?」と思つても仕方がないか。

とりあえず邪魔になつてるっぽいんでさつさと中に良べとじようか。

「いいだろ? 貴様らが

「

「海斗。そろそろ入るか」

「そうだな」

「僕を無視するならこいつらもそれ相応の態度を・・・え?」

なんかソントク君だ騒いでいた氣もするが、たぶん氣のせいなんで、氣にしないでおこう。うんうん氣にしたら負けだ。まだなんか「おい、貴様ら待て!」とかいっているような気がするが、氣のせいなんか氣にしない。

そんなことで体育館に入ったわけだが、男しかいなかつた。なんともむさい。そんなことを思つていてるといかにも『教官』っぽいひとが口を開いた。

「貴様ら、静かにしろ!」

シーン

最初から静かだったので、特に変わりはない。つか、何でこいつわざわざ言つたんだ?あれかな?頭でもおかしくなつたのかな?それとも耳が遠いのかな?まあ、どちらにせよいい病院を知つていてるの俺がわざわざ教えてやる。

「早急に駅前の病院に行つたほうが良いんじゃなイカ?」

・・・どこかのイカ娘風にいうつもりはなかつたんだが、なんか自然にそうなつた。これはヤバイ。俺も行かなきやならなくなる。それはマジ勘弁だな。

「おい、貴様!」

『・・・』

「おいやこの貴様！」

『・・・』

「無駄にハンサムな貴様だ」

『え？俺？』

「ちがう！6列目の左から3番目の貴様だ！」

いつたいどこのドイツだ？初日から教師に目をつけたやつは。確か6番目だよな。おろ？俺の列ジャン。んで、左から3番目だったよな確か。・・・あれ？・・・俺？

「・・・あれ？・・・俺？」

「貴様以外に誰がいる！」

「いっぱい」

「そういう意味じゃない！」

・・・あーこいつ、俺の嫌いなタイプだわー。俺が通っていた高校にもいたが、いつも大声で話して、生徒を威嚇してやつ。しかも、なんか見下した眼してくるし。人は、生まれつき平等なんだからそういうやつは、人生を一度やり直したほうがいいと思う。

まあ、今はそんなことより面倒だが、こいつの相手してやるか。ホントに面倒だが、仕方なく。

「なんだ？」

「教師に向かってなんだその口の利き方は！」

「まだ入学していないから、俺はココの生徒じゃない

「もんをまたいだ時点で、ココの生徒だ！」

・・・仮にそうとしても、人は生まれつき平等だ。教師だろうとなんであらうと、対等なことには変わりない

「貴様・・・」

俺が眞面目に答えると、大声威嚇教師（以降『だい』）は、俺に近づいてきた。拳を強く握つて。

「なんだ？やうひつてのか？」

「・・・良いだろ？どうやらお前は少し痛い目にあわないと理解できなこようだ、なつー！」

そつ言つていきなり殴りかかってきた。普段、過激な殺し合いをしているのでこの程度の速度ならたやすく避けられる。だが、俺はあって避けなかつた。

ガスツ

「・・・これで終わりか」

「つ・・・」の減ららず口がつー。」

ガスツ  
ガン  
ゴスツ

そのあと、俺は『だい』に何度も殴られた。殴る速度は最初に殴つてきたときと変わらない。だが、俺は全部の攻撃を受けた。わざと。

「・・・それやめたらどうだ？」

「いのつ」

「俺はお前のために言つているんだがな

「なんだとー？」

「・・・自分の手を見てみる」

俺は『『だい』』にそいつて『『だい』』の手を見る。俺の言葉に『『だい』』も、自分の手を見た。赤く腫れていて、何本かの骨がヒビないし骨折しているようだ。もちろん、俺は無傷。普通に海斗の攻撃の方が痛いな。まあ、あれだ。よくある『その程度痛くも痒くもないわ！』とか『ん？なにかしたか？』ってな感じだ。それにしても、痛そうだな。見ていてこっちもなんだか少し痛くなってきた気がする。まあ、戯言だけだ。

「つー？」

「速く保健室とかに行つた方がいいんじゃないか？」

そう俺が言うと、『『だい』』は俺を睨みつけながらどっかに行つてしまつた。だいじょうぶかな？少しやつちまつた感があるが、気にしないでおこなへ。・・・でも、なんか嫌な予感しかしないな。

「・・・海斗。もしかして、俺やつちまつたか？」

「もしかしなくても、やつちまつたな」

やばい、初日から呼び出し食らひかも。俺、これでも学校で呼び出し食らつたの賞を取つたときぐらいなんだぜ？

だが、俺のそんな心配も杞憂に終わり、入学式も普通に始まつて、普通に終わつた。まるでハムの人みたいだ。「普通つて言つなあ！」とか聞こえてきた気がしたが、気のせい。そう、気のせいだ。決して俺が怖いから勝手に気のせいにしてるといつわけじゃない。

・・・ホントだからね？

信じてくれる？ そうか、よかつた。とこりでその手に持つていてるそはなんだい？

え？

『こんな国の怖い話100連発！これで今夜は眠れない！』  
だって？

・・・すいません。嘘つきました。ホントはものすごく怖いです。  
だから、本を開いて早速読もうとするなあ！いや、読まないでくだ  
さい！お願いします！いや、マジ勘弁！一話一話の中の鬼  
の『』とかいわないでええええ！

今回もなんかおかしなことに・・・

相変わらず駄文です。

熱があるんでいつもよりひどい気が・・・。

P . S .

今日カラオケ行つてきました。

6時間耐久やつたので、のどが死にました。

Part・11 戯言シローズの能力をもらひたわけ・・・(前書き)

11話目です

相変わらず変なテンションに風邪もあいまつて

ヤバいことに・・・

## Part・1-1 戯言シコードの能力をもじつたわけ・・・

入学して半年

入学してから半年がたつた。  
え？

展開が早い？

だつて仕方ないじゃん。この半年いろいろありすぎて速に忘れちまつたんだよ！

・・・はい、そうですね。いいわけですね。ええ、わかっています。  
そうですね。すべて私が悪い！」やいましたあ！・・・だから、ね。  
その某ひぐらしに出てくるヤンדרのヒロインが持っている得物をしまつてくれませんかねえ。私今までにないほど命の危機を感じてるんですけど！まつて。冷静に。そつそうそう、そのままそれをこちらにわたあああああ・・・・・。

しばらくお待ちください

・・・コホン。  
えー、大変お見苦しい姿をお見せしました。（あれはすべて脳内の出来事です）

話を戻します。

えー、あのあとクラスに入ったわけですが、案の定俺はみんなの視線をひとりじめした。そして、原作通りソントク君が突つかつてきたわけですが、海斗君がこれを撃退しました。あの、プレイヤーの腹筋を崩壊させた会話をナマで見ることができて秀樹感激！！

・・・古い？

秀樹なめんなつ！

「ローラー」

つて歌うとこの田の前におばさんがいたから

「ろーばー」

つて歌つた勇者だぞ！

俺は無理だわ。そんなことできん。もちろんその後の展開的な意味で。

・・・コホン。

また脱線してしまいました。戻します。

えー、どこまで言つたつけ？・・・あ、そうそう。そんでその後、薰とか侑祈とかも会つたわけだけど・・・。薰、マジヤバイ！メツチャかわいい！思わず凝視しちやつたよ！何あの白さ！何あの肌のきめ！いやマジヤバイっしょ！（幹久風に）いやー、眼福眼福。ちょっと（かなり）変な目で見られたけど気にしない。

ちなみに俺の自己紹介は某SOS團團長みたいなことを言つました。

『「Jの中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら（ ）』

こんな感じである。もちろん、みんなに白い目で見られました。とにかく初日はいろんな目で大変だったね。みんなに変な目で見られるは、教師には目つけられるわでもつ目も当たられんね。

その後もいろいろあつたね。海斗がブラックサンタ出したり侑祈に勝負挑まれたり。

何より一番の出来事は海斗と薰がキスしたことだね！海斗羨まし過ぎんだろう！何で俺じやないんだよっ！って本気で思ったね。

そんなこんなで夏休みもいろんなことがあつたけど無事終わり（合宿は適当にごまかした）、テストや体力測定も適当にやって（テストは6割キープ、体力測定はオールB）、普通の評価を得た。まあ、入学式の“あれ”のせいで、教師たちには目をつけられてるが。

まあ、今はそんなことおいて。

今日は、調理実習だ。

原作では調理実習とかなかつたからびっくりした。つか、必要あるのか？と、思つたが、戯言シリーズをもらつたときにやうとした1つ目の目的を使用できる！いままでろくな器具がなかつたからできなかつたが今回は違う！

そうー俺の一つ目の目的は

『【天才・料理人】を使ってオムライスをつくる』

ことだ！

俺は卵料理が大好きだ！卵焼き、目玉焼き、オムライス、オムレツetc. . .

もちろんマヨラーであるー

禁書田録のOP『NO, but it's のれびの出だしが『マヨナードー』と聞こえるぐらいの！

・・・え？

みんなそう聞こえる?  
ははは、ご冗談を。

そして、今日の課題は『オムライス』！やつたね！ちなみにメンバーは俺と海斗と薰だ。ほかのところは大体5人で構成されているが、ココだけ3人。理由は『あふれたから』らしい。だったらどうか4人にしたら良いだろ！つてはなしだな。まあ、俺にとつては好都合だが。

ということで

「海斗、薰」  
『なんだ？』  
「一切手を出すなよ？」  
「は？」  
「まかせろ」  
「ちょ！？海斗！何を」  
「まあ、みてろ」

反抗しようとした薰を海斗が抑える。さすが海斗。わかる男はかつこいいねえ。海斗には、小さいころから俺の料理の味見役をしてもらっていた。最初はいやそうだったが、一口食べたら『おいしい！』といって、それから喜んで味見役をやるようになった。最後に俺の料理を食わせたのが9歳のころだから、久しぶりに食べる俺の手料理に期待してるのはかな？ふふふ、期待に添えられるようにがんばるとしますか。

「えーと？たしか、まず、中に入れる具を細かく切つて

たまねぎ、肉を細かく切る。ココで、【天才・料理人】と、なぜか【ガングダールヴ】の能力が発動。包丁の使い方を“理解”して、す

ばやく切る。

トットツトツトツトツトツ  
スースースースースース

「す、すじい」

「だから言つただろ?」

「次にー? フライパンでこれを炒めて・・・ ロロでケチャップ投入  
!・・・んでロロでじ飯ー」

フライパンに油をしき、たまねぎと肉を入れる。火が十分に通った  
ら、ケチャップを入れ、ご飯もそこに入れてよく混ぜる。これで『  
オムライス』の『ライス』の部分が完成。

「お次は? 玉子を割つて塩、こしあわ、マヨネーズを入れてよく混  
ぜる。フライパンに玉子をいれて焼く」

玉子を割り、塩、こしあわ、マヨネーズを加えてよく混ぜる。フライ  
パンに油をしき、玉子を流し入れて焼く。マヨネーズはふんわり  
感を出すために入れ。 ( ロロ重要 )

「半熟のときに、『ライス』を玉子に乗せ、そのまま玉子をフライ  
パンのはじによせる。そのまま皿に、返しながら置き、形を整える

半熟の状態のときに、『ライス』を玉子の中央に乗せ、玉子をすべ  
らせるようにフライパンのはじによせる。それをそのまま皿の上に、  
返しながら置き、形を整える。ロロで『半熟』について気をつける。  
早過ぎればべちやべちやになり、遅過ぎれば『ライス』とつまく絡  
まない。早過ぎず遅過ぎず、卵の固まるスピードを“理解”したう  
えで『ライス』をいれる。これで『オムライス』の完成だ。

「空いたフライパンに、ケチャップ、コンソメキューブ、にんにくと水大さじ3～4を入れて火にかける」

ケチャップはあたりまえとして、コンソメキューブとにんにくはなんとなくだ。これで俺流ソース（洋風）の完成だ。

「あとは、これを『オムライス』にかけて・・・よしーできた！」

「ふう・・・。われながら惚れ惚れするほどの手際のよさだぜ。まあ、これも【天才・料理人】のおかげなんだがな。それを知っているのは、この世に俺しかいない。

「んじゃ、食うか。いただきます」

「いただきまーす」

「い、いただきます」

完成したオムライス（3人で分けた）を、それぞれ食べ始める。

「うん、うまいな」

「久しぶりに食べたが、やつぱりうまいな」

「お、おいしい・・・（羨ましいな・・・）」

俺、海斗、薰の順番に感想を述べていく。評価は上々。さすがだな。

ちなみに他の目的は『2・【罪口】の能力を使い、自分専用の武器を作る』と『3・【曲絃糸】をつかって【君の知らない物語】を一人で弾く』ことだ。もちろん3は二口動にうつするつもりだ。狐の仮面つけて。

そんなこんなで、調理実習が終わった。

Side : × × × ×

はあ、昨日も『ベルム』さんこなかつたなー。  
『去年ぐらい』『ベルム』さんを見ていない。私が学校に言つてい  
る間に来ているんじやないか、と思いギルメンに聞いてみたがみん  
なの返事は『知らない』の一言だ。

「どうしてこなくなつてしまつたんでしょうか……」

私は最近そのことばかり考えている。だから、いつも以上にいろんなことで失敗してしまう。  
お姉様もお父様『大丈夫だ』って言つてくれるけど、私が大丈夫じゃない。

「……どれもこれも『ベルム』さんがいけないんですね」

そうです。そうですよね！全部『ベルム』さんがいけないんです。  
私がこんなに心配しているつていうのに、なんにも言わないで突然姿をくらまして……。

たぶんこんなことを考えていたから、あんなことになつたんだろう  
と思う。でも、後悔はしていません。むしろ、『私、よくやつた！』  
と褒めてあげたいくらいです。

「つー危ない！」

そう、これが彼との始めての出会いでした。

今回も短いです

感がいい人（よくない人も？）は気づいていると思いますが

ヒロインフラグが建ちそうです

ヒロインにするかしないかは感想に書いてください

話的には海斗がどの行動をとるのかで道が決まるので

ここでも凌矢がフラグ建てても、ルートがひとつ消えるだけです

私敵にはヒロインにしたいです。

Part:12彩現るーー・・・(前書き)

12話目です

「Battle Moon Wars 銀

を久しぶりにやつてたら更新遅れました

すいません

Side・凌矢

調理実習も無事終わり

なんとなく外の空気を吸いながら考え方をしていた。

「みんな強くなつたかな？・・・」

そう、俺はギルメンのことを考えていた。

1年前、入学すると決めて以来、一度もログインしていない。  
入学する直前になつて気づいたが

「いまさらログインしても遅いよね」

と思い、結局、ギルメンには何も言わないまま1年を過ごしている。  
夏休みは、海斗や薰といふと飽きなかつたので  
特に外には行かなかつた。（侑祈がしつこく誘つてきたが、暑いし  
めんどいので行かなかつた）

俺が何の連絡もなくログインしていないの心配していないだろうか？  
「・・・まあ、あいつらに限つてそれはないな」

そう思いながら校門に向かいながらぶらぶら歩いていふと視界の端  
に鮮やかなピンク色がうつつた。その容貌と髪の色は見慣れたもの  
で

「あれはー・・・彩か」

この『暁の護衛』の世界のヒロインのうちの一人である『一階堂  
彩』がふらふらしながら校門に向かっていっていた。まさか、こん

などここで主要キャラに遭つとな・・・。つか、彩だ！彩だよ！  
生彩だよ！…『暁の護衛』に出てくるヒロインはみんなわいいけど、そんな中で特に『胸』の大きさに関しては彩と萌の独壇場である…ああ、あの『胸』でもふもふされたい・・・。まあ、麗華の控えめな『胸』も好きだけどなつ…巨乳には巨乳の、ひんぬーにはひんぬーのいいところがある！

まあ、そんなくだらなことを考えながら、彩の行動を観察していった。まあ、こんなところだし、事故にあつたり通り魔に刺されることはないだろ？。そう思ふ俺は帰らうとした。だが、次の瞬間そんな考えは吹っ飛んだ。

その彩が、何を思ったのか車道に出て、そこには圧倒的な質量を持つた物質が走つてくる。彩はまだ気がついていないようだ。やばいっ！このままじゃ、彩が轢かれる！そう思つ前にもう体が動き出していた。

「つー危ないー！」

「え？」

間一髪のところで彩もろとも歩道に転がることができた。「あぶねえじやねか！」と、車の運転手が言つてきたが「あんた、この辺轢いてたら死んでたよ」と返してやつた。『何を馬鹿なことを』みたいな視線を運転手が向けてきたが、彩の制服を見た瞬間、顔が青を通り越して白くなつていつた。

「あんた。今こじで起ひたことは忘れてやるから、早く口から去つたまつだ良いぞっ！」

「ひー、お、おひ！」

そう言つて運転手は逃げるよつ（実際に逃げてるのだが）に車を運転して去つていつた。

「…………」

・・・あ。そういえば彩抱えたまんまだつた。忘れてたわ。つか、この腕に伝わるやわらかい感触は・・・いかんいかん。まだ感じていたいが、とりあえず（・・・）安否確認しなければいけない。

「おい、大丈夫か」

「え、あ、はい」

「怪我とかしてないか？」

「あ、は、はい。大丈夫だと思います」

「そつか」

とりあえず怪我とかしていないらしい。それはなによりだ。彩頭はあれだが、結構好きなキャラだから怪我とかしていたら俺発狂してたかもしれん。とりあえず、スーツについた埃を払いながら立ち上がる。彩はまだ呆けている。

「ほら

「え？」

俺は彩に向かつて、手を差し出す。そうしたら、何を思ったのか、俺の手の上に自分の手をグーにして置いてきた。

「…………」

「はい？」

「なんで『お手』なんかしてんだ？」

「へ？あああああ、『めんなさい』！」

そう言って彩はものすんごい速さで手を引っ込めた。恥ずかしかったのか、若干顔が赤くなっている。そんな彩にもう一度手を差し出しある

「ほら、つかまれ  
え、あ、はははい」

今度はちやんと云わつたらしく、俺の手をちやんとつかんだ。・・・  
決して『彩の手やわらかえ』とか『ずっとつないでたいなあ』  
とか思つてない。

・・・はい、嘘をつきました。思つてました。めつちや思つてました。だって、彩の手めつつつちややわらけーんだもん。それに、ゆいにゃん（本名：榎原ゆい）ボイスだぜ？俺の中のエロゲ声優ランキング5位だぜ？ちなみに1位は一色ヒカルさん、2位は青葉りんごさん。3位が大波こなみさんで4位が桜川未央さんだ。何気ないメジャーな人ばかりというのは仕方がないことだ。

ただいま死合（一方的な）中なのでしばらくお待ちください

・・・「ホン。

えー、大変の見苦しい姿をお見せしました。話し戻します。  
彩の手を引き、としあえず立たせた。

「あ、あのー、ありがとびざいました!」

「ん?あ~, い~よ。偶然通りかかっただけだし

としあえずホントのことを述べながら、手を振る。

「あの~, お名前を伺つてもよひしこじょつか?」

「んあ?ああ、俺の名前ね・・・。俺は

そ~で俺の中の海斗がささやいたー。『』せこひみ遊んでやれー。  
と。もちろん俺はそれ

「ステイーブン・セガールだ

「え!~あの渋いところが人氣で、関西弁ペラペラのハリウッド俳  
優と同じ名前!~・・・つて、どこからどう見たって日本人じゃな  
いですかっ!」

・・・なんで関西弁ペラペラついてんねん。

「え?奥さんが関西人だからに決まつてるからじゃないですか。こ  
れ、結構有名ですよ?」

あ、そりなん。・・・って

「俺の心読んだ?!

「はい?」

「今俺の心の中読んだよね？！」

「え？ いいえ？」

「……え？ ジャあ、何でわかったんだ？」

「顔に出てますから」

「もうなのか……」

「どうやら、俺は思っていることが顔に出てるタイプらしい。今まで気づかなかつた。」

「……あーやっぱ。海斗に稽古つける約束してたんだ」

「え？」

「俺用事あつから、また縁があつたらー」

そう言つて俺は領に向け走り出した。「あのーーーお名前はーーー！」とか聞こえてきた気がしたが、今はかまつてられないでの、無視する。

Side・彩

「俺用事あつから、また縁があつたらー」

そつ言つて彼は校内へと走つていきます。……あーそういうえばー！

「あのーーーお名前はーーー！」

と問いかけてみたが、彼は止まることなく校内へ消えていつてしまわれました。

最後までお名前を聞くことができませんでした。私の命の恩人なのに・・・。

でも、なんてベタな展開なんでしょう。

私が歩道に出る 車が来る 彼が私を助ける 名前も言わないで立ち去る

うん、これだけ見ても『どこの少女マンガですか!』って「シシコミハタケ」になります。でも、本当に少女マンガのようなら、この後彼と偶然で会うでしょう。

でも、私の初恋はまだ終わっていません。彼は、ものすごくかっこよかったです。私にはもう好きな人がいます。・・・』「ココ一年会話をしていますが。

「『ベルム』さん・・・」

『どうしてログインしてくれないんですか・・・?』

私は好きな人の名前をつぶやきながら、そんなことを考えていました。

Part: 12 彩現るーーーーーーーー (後書き)

今回も

かなーりグダグダになつた気が・・・

こんな拙い文ですいません

Part13・原作開始・・・? (前書き)

13話目です

やつと原作が始まひとつとしておつります

お願いします

Side:彩

『彼』に助けてもらつてから半年近くたち、私達はあと少しで2年生になります。

短いようで長かったこの1年間もようやく終わりを告げるようですね。

・・・相変わらず『ベルム』さんは、ログインする毎配されあります。

もう、私達のことを忘れてしまったのでしょうか？・・・いえ、『ベルム』さんに限つてそんなことはありませんね。何よりも『仲間』を大切にする『ベルム』さんにとつて、私達【赤蛇】はかけがえのない存在だと思います。一度、

『ベルムさんにとってギルドとはなんですか？』

と聞いたことがあります。そうしたら

『仲間であり、家族だ』

と、言つていました。『かつこつけてる』と、普通の人は思うかもしません。でも、普段の行動とかを見ていると『やつぱりな』と思ふ人もいるでしょう。だつて、無償で課金アイテムくれたりする人を私は『ベルム』さん以外見たことがありません。レベルが一定に到達したりしたときも『ベルム』さんは課金アイテムをくれます。

・・・何か話しがずれた気がします。

まあ、いいです。そんなことより今は重要なことがあります。

「どうしましょうか・・・？」

私達は、一般的に『護衛対象者』と呼ばれ、2年生にあがるとき同学年の生徒から『護衛者』を選びます。同学年についても、いつしょに勉強したりしてきた人ではありません。1年生のときは『護衛対象者』と『護衛者』は別々に授業を受けます。細かいことはわかりません。

そのため、『護衛対象者』には『護衛者』の能力値などを記した書類が配られます。そして、その中から自分が『この人なら私の護衛を任せることができる』という人を選び、提出します。基本私達の意見を尊重し、自分が選んだ『護衛者』になります。

「誰でもいいんだけどなあ～」

私はそんなことを思いながら、書類を一つずつ見ていきます。特に要望がない場合は、学園側が危険度に応じて『護衛者』を選びます。

「あ・・・この人・・・」

そんな中、私はある書類のところで手を止めました。『彼』の顔写真が書類の右上に写っていました。どうやら『彼』も『』の生徒だつたようです。そんな『彼』の経歴を見てみると

「住所不明、出生不明、家族構成不明、趣味読書、特技ピッキング、声帯模写・・・」

なんやねん。

あからさまに怪しい経験でした。名前が下沼凌矢さんというらしいです。『意外と普通の名前だなあ』とかは思っていません。嘘じやありません。本當です。・・・ええ、分かってくれればいいんです。と、いうよりもそもそも、何で特技がピッキングなんですか！？しかも、声帯模写つて・・・。あの時彼を見たときも思いましたが、彼は何か他の人とは『違う』気がします。『何が』と聞かれたら答えることができませんが、何か『彼』のオーラ・・・とでも言えばいいんでしょうか。それが、明らかに違う気がするんです。まあ、たぶん私の気のせいだと思いますが・・・。

そんなことを思いながら経験を見ていました。全部見終わったとき、私は『誰』を『ボディーガード護衛者』にするかもう決まっていました。

「よし、下沼凌矢さんにしよう・・・」

そう、あの時助けてくれた『彼』の名前を呼びました。

Side: 海斗

人の記憶は曖昧で、人の記憶はおぼろげで、

人の記憶は時に幻想を作り出す

それは防衛本能であり、それは、実を虚に変えるものとなる。

物心がついて最初に教わったのは、人を疑い信じ、そして『愛す』こと『だつた。この腐りきつた世界でも、人を疑い信じ愛することはできる、だが、自分も信じると。そう教えてくれた人も、人を疑い信じ愛したと言つた。人はいつか裏切る。だが、その裏切りすら愛

せと。『裏切り』という言葉に振るえが止まらなかつた。だつて、その人が大好きだつたから。だから震えた。なんて……恐ろしいんだろう。なんておぞましい世界なのだろう、と。でも、その人は、こうも言つた。

『愛すこと』

こんなにも溢れた同じ存在のなかで、自分は『愛すこと』のできる人にめぐり合えるのだろうか。そう考えた。人を疑い、信じて、愛す。

『それが現実』

その人は一度頭を撫でて、漆黒の瞳でそう言つた。

少なくとも、ココ一年間を平凡な毎日だと思つたことは一度もない。学校に行く日常というものは、俺にとつてどれも新鮮だつた。単純に、日常かどうか考える余裕がなかつたとも言える。だからこの一年間はとても楽しかつた。そして

平穏な街並みそのものに見える景色。そこに浮かぶ異質な存在たち。

「くつ……離せ、このバカ者がつ！」

「早く押し込め！邪魔が来るぞ！」

黒光りするバンに、少女を押し込もうとする複数の男。それも夜間ひつそりではなく真昼間から。男を観察すべく視線を送る。

……あの一人、顔濃いな。髪も濃い。

いや、今はそんなことどうでもいい。誰がどう見ても、紛れもない誘拐現場。だが、誰も助けに入らない。それが現実。他人のことなどどうでもいい。かわいいのは自分だけ。それは、人のるべき姿。

「軽々しく、私に触れる、なつ……！」

「半殺し程度で済むと思っていたら、大間違い……！」

抵抗している少女は、学生服を着ている。それも、よく見慣れた。

「つむせえー！」

パシッ

「ぐあつー！」

少女の頬は、悲鳴とともに赤く染まった。

「これ以上痛い目見たくなかったら、さっさと乗れー！」

少女の姿はバンの中へと消えていく。

あらかじめ言つておく。オレは周囲の自己保身に走る人間と同類だ。だが、オレは駆け出して男たちの車に手を伸ばしていた。

なぜかつて？

それはオレが、日常を逸脱した世界を求めていたからだ。

そう、逸脱した世界を……。

まぢはじめに

すこませんでした！――！――！

もつ、海斗のやつはとんどパクリです。

すこません。

やじて変なとこひで終わってすこません！

ホンッシシットに申し訳ありませんでした！――！

まあ、そんなこんなで原作に入ったわけですが

この後の展開どうしようか・・・

## Part14・彩H・・・(前書き)

14話です

今回も原作に沿つてやりたいと思つてます

・・・一部イレギュラーあります

Side・凌矢

誘拐事件の2週間前の朝

彩を助けた後は、特に大きな事件や行事もなく、あつという間に2年生進級まであと数週間となつた。この1年間は長いようで短い、退屈しない1年間だつたと思う。実際、海斗と愉快な仲間たちの会話聞いてるだけで何回腹筋崩壊したことか。まあ、俺的には『海斗×神崎の爺さん』のくだりがおも気持ち悪かつたが、一番好きだ。あとは、「はい」「はい、じゃない!」「はい、だ!」のくだりも好きだ。

「確かに今日みんなの『護衛対象者』が決まるんだよな」

そう、俺たちは2年に進級するに連れて『護衛対象者』一人につき『護衛者』が原則一人つく。まあ、例外もあるらしいが・・・。

んで、今日それが決まるわけだ。たぶん海斗は原作同様誰もいないんだろうなー、と思いながら同時に、俺の『護衛対象者』は誰になるのかなー、と考えていた。

まあ、能力とかその他もろもろ考えると、最悪、海斗同様誰もいないパターンもある。そんなことを考えていると、隣の部屋から話しが聞こえた。

「そろそろ起きた方がいい。遅刻してしまつぞ?」

「むにゃ、山手線は乗り過こすとさあ大変。同じじといひに寝つてくれ

るまで1時間もかかるんだぜ?」

・・・だったら、おとなしく次の電車が来るの待とうぜ~。どうせ5分ぐらいで次来るんだからや。そんなことを思つてこないと、薫も同じことを思つたらしく

「素直に乗り換えよくな」

「へ~ん……それは、直点だつたな……むにゅ」

「起きてこるんだろ?」

「……」

「やつぱりつ

さすが薫。海斗<sup>じ</sup>ときの戯れもお手の物。軽くあしらつて、言つてやると、海斗は何も言こ返せなくなつた。いや~、さすがつすね。

「先に行けよ。オレはもう少し寝てる」

「了解した。ただし、くれぐれも遅刻はするな

「ああ……」

『つやら海斗はもう少し経つてから、行くらじこ。だつたら俺もそれに会わせて行こうと思つて、少しの間、まつたりしてゐる。たぶん今、海斗はいろいろと説明してゐるだらうし・・・。そんなことを思つてこると、海斗が動く気配がした。それに会わせて、俺も部屋から出る。ちなみに、オレは一人部屋だ。べ、別に一人だから寂しかつたとか思つてないんだからねつ!・・・すいません。調子こまきました。

「おまよつ、海斗」

「ん?ああ・・・」

挨拶も程々に、俺と海斗は並んで歩き出す。道中特に何もなく、校門前まで到着する。・・・そら、そつか。

「ついたか……」

「ああ

いや～、それにしても、いつ見ても豪華な校門だな。いつたいこの学園建てるのにどのくらいの金がかかることだろうか。まあ、経済界や政治界の重鎮の娘が通つてる学校だからな。昔は、息子も通つていたらしいがな。源蔵と源蔵とか源蔵とか。警備も最新、プロのボディーガードもいっぽいいる。これだけの設備、維持するだけでウン千万かかってんじゃねえか？そつ、ここが俺たちの通つている『憐桜学園』だ。1年前俺たちが入学した超一流の学園だ。

「これが本校に続く中庭だ」

「……誰に言つてんだ？」

「……さあ？」

・・・まあ、深く考えないようになつ。俺も偶に宇宙意思と会話するからな。

「遅かつたな、海斗」

「ん？」

あ、薰だ。相変わらず美しいですね、はい。

「寝惚けて訓練施設に行つたんじやないかと思つたぞ

「そんな間抜けなことするかよ」

「海斗ならしかねないと思つたんだ」

「ありえない話ではないな……な、海斗」

…… そうかい

海斗が『納得いかない』といつた顔で答える。あ、そうそう。薰つてのは、この『暁の護衛』のヒロインの一人で、『罪深き終末論』で必ずHシーンがある。本名は南条 薫。なんじょう かおる 実は名門の令嬢。ぶつちやけお嬢様。もちろん声は『芹園 みや』さん。有名な役どころは「・・・あ、『恋姫十無双』の張飛と華雄って言えばいいのかな？」まあ、それなりに有名な人であるのは間違いない。

「今日で決まるんだな」

ああ、雇われ先だ。

雇われ先? まあ、言わんとする」とはわかるが……「あ」と詰問、課題づけ? 摂津・

「……………」

俺が嫌味を言つと海斗は『そんなもん、知りん』といつた顔で返してくる。

「正確に言えば、私達は雇われるわけじゃないだろう？給与を貰うわけでも、保障が付くわけでもないのだから」

「そうだな」

うことだ。  
俺たちは、あくまで『護衛者』であり、それ以上でもそれ以下でもない。つまり、だ。俺たちがたとえ死んだとしても、それは俺たちの責任であり、決して『護衛対象者』の責任ではない、とい

「私は少し心配だ。お前がちゃんと選ばれるかどうか」  
「成績が悪いからだろう?」

「セウジヤない。じうもお前は緊張感に欠けるんだ。それで本当に、ボディーガードが勤まるのか？」

「ああ、な」

そうなのだ。海斗は『あまり目立たたくない』と理由から、わざと成績を落としている。でもな、海斗。お前、『悪い』意味で目立つてるぞ？ そう、『悪い』意味で。でも、それ以前にひどいことがある。そう、海斗は『緊張感』が欠けている。

「そうだな。薰やソンは大丈夫だと思つが、海斗はどうだかわからないな」

「……何を言つてゐる？ お前もだぞ？ 凌矢」

「うえ？！ 俺も？」

「ああ」

どうやら俺も『緊張感』が欠けているらしい。まあ、そんなに成績悪くないから大丈夫だらう。あれ？ でも、俺つてここ連中たちにしてみたら、悪いほうなのか？ 最後にやつたテストの順位を思い出してみる。35人中22位。・・・うん、そんな悪くない。悪くない。・・・悪くないよね？ そんなことを考えていると、海斗も同じく何か考えていたのだろう、薰が話しかけていた。

「なにを考え込んでいるんだ？」

「改めてうちの学園の凄さを思い知つていた」

・・・俺も。

「凄さ？」

「いや……」

そのあとは海斗が何か問い合わせていた。その問いに、薫は自信を持つて答えていた。だが、自信にあふれているはずなのに、どこかはかなげな瞳を揺らせ、薫は学園のほうを見つめていた。ああ、薫のこの顔もきれいだな、とそんなことを考えていると

「そんな仕草見せるから、色々厄介な目にあわされるんだぜ?」

「なんだ、その仕草とは……」

会とも、俺と同じことを思つていたらしく、薫に言ひ聞かせていた。

「自覚ないのは考え方だよな。俺も何度も襲いそうになつたことが

そこに、新たに第三者の声が割つて入る。

「侑祈か」

そう、割つて入った声の持ち主は、この1年間俺たちと一緒にばかやつて過ごしたうちの一人である侑祈だつた。本名は錦織にしづき侑祈ゆうき。その正体は、倉屋敷重工くらやしきじゆこうが開発した高性能?ロボットだ。ロボットだが頭はすこぶる悪い。そのかわり、運動能力の面に関しては常人のスペックをはるかに上回る。つまり超人である。ロボットだが。まあ、本人は自分がロボットだつてことを自覚していないらしいがな。

「うつす、おはようさん」

「おはよ」

「おひ、おはよう、侑祈」

「今日も一段と女に見えるなあ、薫は」

「身体的特徴を侮辱しないでくれ。生まれながらのことにに関しては、私にはどうすることも出来ない」

「そうは言われてもなあ……」

「……いや、女だから。だが、それを話すわけにはいかない薫はモノより、持ってるモノはデカイからな」「マジで!?

こうこう風に海斗に度々フォローしてもらつてはいる。

その後も他愛のない会話をしながら、俺たちは学園へと向かった。

## 教室

教室に入ると、これまで一緒に1年間がんばってきたメンバーが揃つていた。みんな、浮き足立つてはいるようだ。

「思い出すな、入学式のこと」「突然背後から話しかけるな、心臓に悪い」

おもむろにソンが口を開いた。海斗とソンの会話は面白いから、俺は黙つて聞き耳を立てる。そうそう、ソンってのはあだ名で、本名は宮川みやがわ尊徳たかのり。名門である宮川家の末弟で、プライドが高く人を見下したような態度を取る。だが、自分が認めた相手には、自分と対等に扱う。能力が高い兄姉にコンプレックスを抱いてはいる。

「一年前にも同じようなことを言われたな」「一年前と同じことをしてくるからだろ」「ふん」「貴様程度の実力で、よく進級できたものだ」「生まれつき幸運の持ち主なんだな」「せいぜい、中流のお嬢さまでも警護することだ」

「俺は誰も警護しない」

「なに?」

「……なんでもない」

「まあ、僕は麗華お嬢さまで当確だらう」

「残念! その役割は海斗だ! んで、お前は妹のほつだ。 . . . 強き生きろーソン!」

「麗華?」

「まわか、知らないなどと抜かすなよ?」

「…………」

「おい」

「ああ、あの……」

「思い出してないな?」

「…………」

「こくら高嶺の花とは言へ、それくらこは覚えておけ」

「ううつてソンは説明を始めた。

「日本でも有数の資産家である「階堂」

「そしてその一階堂家の長女である、麗華お嬢さまだ」

「有数の資産家だから、そのボディーガードになりたいのか?」

「当然だらう。僕らボディーガードにとつて、要人の資産価値はそのまま僕らの価値につながる」

「一階堂家で僕の名を売れば、やがてさらに有名な要人をガードする日も遠くないだらう」

「つて、なにをしている……」

「今後の参考のため、すべてメモしてるだけだ。尊は気にせず喋つてくれていいぜ」

「……学園長宛と書かれてあるが……?」

後輩ボディーガードたちの手本となり、僕は最強のボディーガードとして君臨し、庶民からかけ離れた生活をしてやるぜ、へつへつ

۷۸

「そんな」と書いてなしだらいい。

「腰黒くていいよな」「

よくなしね！」

やつぱつこいつらの茶番は最高だわWW

その後も、他のやつらとなんでもない会話をして席に着いた。席について教官を待つているとチャイムと同時に、やつて来る。

「全員揃っているな？」

そういうてあたりを見渡す。

「お前たちが進級できたこと、心より嬉しく思う」「今年は特に豊作と言つていいだろ？」「僅か数%ではない。数%も違うのだ、誇つていい」「ただし……それはこの教室を出るまでだ」「ただし……それはこの教室を出るまでだ」「お前たちは新しい門出とともに、今まで以上に厳しい現実と立ち向かっていかなければならぬ」

「今ここで、もう一度思い返してもらいたい。自分に与えられた使命はなにか、自分の存在意義はなにか？」

相変わらずバン、バンうるせえな。

「尊徳、どうだ、答えられるか?」

「われわれの使命は、プリンシバルを命がけで守ることです」

・・・なんかはじまつた。つぎこれから無視しよう。

「さて……そろそろ本題に入らつ」

お~おわつたぽい。

「今まで正式決定したには23名だ」

「この決定に対する意義は一切認められない」

「富川尊徳！」

「はい！」

「プリンシバル、一階堂……」

ここまでは原作

「一階堂……彩の警護の補佐を命ずる」

「……え？」

「すみません、今なんと……？」

「一階堂彩の警護の補佐を命ずると言つたんだ」

・・・は？補佐？

「そして、下沼凌矢！」

「・・・はい」

「お前には、プリンシバル、一階堂彩の警護を命ぜる」

・・・なんでも。

待て、落ち着け。どうしていつなつた？俺は何も

「……あ

やべ、一回助けたじゃん。いや、それはありえないだろ。

「ちなみに、これはプリンシパル本人の強い希望による決定だ」

・・・彩エ・・・。

「つして俺は、彩のボディーガードとなつた。

P · S ·  
他の人たちは原作道理になりました。

すいません

すいません

無理があるの覚悟でやつました。

突っ込まないで

自覚してますから。

## お知らせ

テストが終わつたら更新します。

ちよつと

いや、かなり英語がヤバイ。

ほんとまじで

どひじょひ・・・

覚えれない

単語とか意味とか・・・

もひじうしたらいいか分からない。

数学でも無理・・・

漢文は何とかいける・・・

でも、古文は・・・

ああああああ

どひじょひ・・・

物理とかもつてのほかだ。

元科学部だけど

そんなのかんけーねー。

・・・もしかしてここで俺の人生ゲームオーバーですか？

いや、あきらめたらここで試合終了だ！

あきらめない！

あきらめないぞ！

やああつてやるぜ！

お知らせ（後書き）

精霊使いの剣舞新刊買いました。

後

この中に一人、妹がいる！4巻買いました

マジホラー小説w

麗華が誘拐され……ない……だと……？（前書き）

おひひれー

麗華が誘拐され……ない……だと……？

「何で僕が貴様の補佐なんてしなくちゃならないんだ！」  
「いや、俺に言われても……」

とりあえずなんでこうなったか思い出してみよ。

（回想）

「教官！『補佐』とはどういうことですか！」

「ん？ 宮川か……。『補佐』というのはその名の通り本来の『ボディーガード』をいろいろと助ける役割だ。この場合は『ボディーガード』は下沼だな」

「何で僕はこいつの『補佐』をしなければならないのですか！」

「オイ、ソン。人のこと指差すな。失礼だぞ。

「……プリンシバル二階堂彩は、今年2年になる生徒の中でもっとも危険な生徒だ。そして本人は下沼を指名した。この学園は極力プリンシバルの要望は取り入れることになっている。だが、指名された下沼の能力ははつきりって役不足だ。そのことを二階堂彩に伝えたところ『それでもかまいません』と返事をしてきた。だが、不安が拭えない私達は緊急会議を開き打開策を考えた。それがお前だ、宮川」

「……つまりビッグことですか？」

つまり、俺だけだったら危険だから、能力がすごい生徒をつけちゃえってことだな。

・・・失礼な。ここにいるボディーガード全員が一斉にかかってきても勝てるツーの。

(はいはい、チート乙www by作者)

うつせ！お前は黙つてろ！

「つまり、だ。今年の『ボディーガード訓練生』の主席であるお前を補佐につけば、不安はなくなる、と私達は考えたのだ。その結果が富川、おまえが『ボディーガード』の『補佐』として役割に付くことだ」

「しかし……！」

「富川、お前たちの使命はなんだ？」

「……われわれの使命は、プリンシパルを命がけで守ることです」

「そうだ。そしてお前はこれから一階堂彩のボディーガードの補佐としてその使命を果たすことになる」

「ですが……！」

「……富川、お前に拒否権はない。納得がいかなくとも、その身を盾として守り、使命を果たせ。私から言えることは以上だ」

「……わかり、ました」

（回想終わり）

なんかいま思うとソンに同情してきた。

だって自分が嫌いなやつの『補佐』をしなきゃならないんだぜ？  
俺だったら死んでもやだね。

「そもそもなぜ貴様が指名される！？」

「いや・・・知り合い？だから

「なぜ疑問系！？」

いや、だってね？一回助けただけだし、いつから名乗つてないし、あっちの名前も聞いてないし。

「はあ……もういい」

なんかため息つきながらどうかいつちやつたよ。

「凌矢」

「ん？ どうした薰？」

「彩様と知り合いなのか？」

「知り合いつていうか、顔見知りつていうか」

「・・・ずいぶんと曖昧なんだな」

「まあ、名前も言わないでその場去つたからな

「・・・はあ」

あ、いま『おまえつてやつは・・・』とか思つただろ！ 絶対！

むー！

しうがないじやんか。海斗に稽古つけなきやいけなかつたし。  
・・・つか、むーつてなんだ、俺よ。キモいぞ。

「ま、とりあえず帰るか」

もうひん帰つたらいつものメンバーで遊んだ。

数日後

おつす。

今日は、海斗が麗華を助ける日だ。

でも、原作と違つて海斗は、かなり今の生活に充実している。

退屈病（命名：備）はなんか知らんけど出てきてない

・・・これってヤバイよね？

もしかしたら  
海には麗華を助けるに行かないかも

いや、その場に居合わせたら、間違いなく助けていくと思うが。  
あいつ、なんか正義感とかメツチャ強くなつてゐる。

じゃあ、後はどうやってあの場面を見せるか、だな。  
たぶん海斗は真面目に学校行くだろーし。佐竹との“あれ”はなか  
つたからね。  
あの銃のやつ。

う  
ん

どうするか。

俺がやるしかないのか？

・・・やるしかないか。



＼＼＼＼＼

とこり」とで、むづ少しで8時半です。

ちやんと海斗には『話したいことがある』つて言つておいた。

・・・は、これで俺も遅刻かー。

まあ、終業式とかダルいから出る気なかつたけど。

「どうしたんだ？もう遅刻確定だぞ」

「いやー、『めん』『めん』。ちょっと話したいことあつてね。・・・・・で？海斗。この一年どうだった？」

「・・・・・楽しかつたぞ？」

「そつかー、俺も楽しかつたな」

「・・・・・それがどうかしたのか？」

「いやー、なに。海斗が誰の護衛にもならなかつたらどうしようかと想つてな」

「・・・・なるようにしかならないんじやないか？」

「まあ、そうだな」

と、そのとき

キキイイイイーーーー

(おへきたか・・・・)

「ぐつ・・・・離せこのバカ者がー」

「早く押し込めー邪魔が来るぞー」

おーおい、こんな真昼間から良くやるなー。  
ゲームやつしても思つたけど、ここいら絶対頭おかしいよな。

「なあ・・・海斗」

「・・・なんだ？」

「あれって・・・誘拐、だよな？」

「・・・たぶん、そう、だろ?」

「うわあー」

とつあえず、海斗にあいつらを捕捉せよ。

「軽々しく私に触れるな・・・っ！」

「半殺し程度で済むと思っていたら、大間違い・・・！」

「つるせえ！」

パシーンッ

「くあつ！」

「これ以上痛い目見たくなかったらさつとくまじあー...?」

ドーンシ！

・・・え？

あつれー？

おかしいなー？

何で俺の目の前で、あの黒い男、海斗からドロップキック食ひつて  
んの？

おいおいおい！

原作無視もいいところですねー！まったく！

「ねいひー」

「あべじつー」

「ねいひー」

と、いいながらも参戦する俺。  
つぐづぐになつちけり。

「い、この野郎！」

そう言つて、俺が殴つたほの男が拳銃を出してくる。

「死ねつー」

「お前が、なー」

とりあえび拳銃を持つてゐる腕を右足で蹴り上げる。  
そこから顔に左足の回し蹴りを食らわせる。

「ひでぶつー」

「おおー」

メソチヤ吹つ飛んだ！

・・・つか、や。

あいつ、北斗の ファンか何かか？  
やられ方がまつたく同じなんだが？

・・・この際そんなことはどうでもいいか。

「・・・ふつー」

「ああー やがれー」

お？あつちも終わったみたいだな。

「おーい、海斗。そつちも終わったみたいだな」

「ああ

よしよし。

「じゃ、いくか」

「そうだな」

「・・・はつ・・ちよ、ちょっと待ちなさい・・・」

お？麗華が食いついてきたぞ。

よし、ここは

「海斗。よろしく」

「何で俺なんだよ」

「いや、だつて・・・あれ？」

・・・いさ、おかしい。オイ麗華。ここは海斗に視線を向けるべきだろ？何で一人に向けてんねん。

「あんた達、助けるだけ助けといて、勝手にどこへ行へつもつよ・・・

「え？」

「どこつてそりゃ・・・

『学校』

「こんな時間に学校つて遅刻じゃないーしかも、何で疑問系ーー？」

おつかれ。この声いい声だぜ。ですが大波さんだ。

「とつあえずサツに電話だな」

「よし、任せる」

「ちよつと私の話を聞きなさい。」

・・・何か力オスになつてきた。  
つと。電話電話。

「あ? もしもしマッポですか?」

「マッポ! ?」

「え? 警察ですか? 同じじやん」

「いや、警察に向かつてマッポはちよつと」

「え? “よつ”がないなら切る? いやいやいやー。よつ”はこむ時  
に切るモンでしょ」

「・・・ああ、用と妖をかけたのか」

「ああ、なるほど・・・つて、分かりにくつ! 」

「え? あ、いや、事件があつたから電話したんすナビ

「何かいきなりチャラ男みたいになつた! 」

「え? 場所? ここはー・・・オイ、海斗。こじりだ? 」

「俺も知らん」

「いや、それぐらい知つておけよ! 」

「近くに何か建物がないか? ・・・『L i t e f i n e』つて  
のがあるな」

「いや、ここにそんなのは・・・100m先にあつた! ?」

「おくおく、じゃ、よろびべー

「古つ! !

「よしこれでおくだ

「よし、じゃあいくか

「ハアハア・・・ちよつと、待ちなさいつて、言つて、ゐでしう、  
が! 」

「何でそんなに疲れてんだ? 」

「あなたのせいでしょうが! 」

「何でそんなに疲れてんだ? 」

「あなたのせいでしょうが! 」

いやー、相変わらず麗華の突っ込みは冴えてるねー。  
も、ひ、72点あげちゃうー。

・・・え？

微妙過ぎるー、って？

まあ、そう簡単に満点はあげられないからね。  
何様だよとか思つたやつ。

介入者様だよ！

「とりあえずアンタ達。このタクシーに乗りなさい」  
「いやいや、タクシーなんてどこに・・・あつた！？」  
「い、いつの間に」

あの滅多に驚かない海斗までも、眼を見開いて驚いている。

「いいから乗りなさい！」

そして俺らは拉致ちがいますされた。

麗華が誘拐され……ない……だと……？（後書き）

久しぶり過ぎてグダグダ　ｗｗ

まあ、気にしないで。

読みたくない人は読まなくていいから。

あと、文句あるなら読まないでね。

アンケートをとつておけばいい。

あ

ここでお知らせがあります。

次回からこの作品は『過去編』にはいります。

そこで！

アンケートをとりたいと思います。

まず一つ目。

柊先生の娘さん・・・そう！絆ちゃん！ですが。

何歳という設定にしましょうか？あ、できれば4～6歳の間で。

一応主人公は海斗の3歳年上。つまり18歳。もう少しで19歳です。

柊先生の過去には必要不可欠の情報のため、ご協力お願いします。

次に2つ目。

ツキに関して。

1、原作通り海斗と雅樹に襲わせるか。

2、それとも、主人公が見つけて保護するか。

2の場合はツキのお母さん生存フラグがたちます。

やつぱり幸せになつてもらわないとねー！

と思う方は2に入れてください。

ご協力お願いします！！

## アンケート結果だけ一応報告！

えー

このたびは  
この作品に関してのアンケートにご協力いただき  
誠にありがとうございました。

こんなもん書く暇あつたらわざと続きを読むと思つ肩もこるかもし  
れませんが！

が！ が！ が！ が！

ですが！

これでやっと話の大筋が決まったのです。

まあ、まだ海斗を罪深き終末論ルートにするか普通に麗華ルートにするか決めてないけど。

そん時はまたアンケートとりますね。

さあ、そんなこんなでアンケートの結果ですが！

ツキぢゃんは満場一致で2番になりました。

ここで、前の話を修正しないといつ問題が発生。

次に辯の年齢についてだが・・・

6歳になつたぜ！！

## 絆は主人公が1

おつと「」からはねたばれになるな。

つか、もうほとんどの人がわかってると思つ。なのにやる必要があるのか、はなはだ疑問に思つ。今日この頃、だが俺はくじけない！

ヒューリカル

にこから気が向いたら更新します。

期待しないで待つててくださりやがりませです。

シキとの出会い - 何話続くかわからなからどうあればやうのー - (前書き)

久しぶり・・・。

シキとの出会い - 何話続くかわからなことからとつあべやかのー -

Side・凌矢

おつ、皆、久しぶり。

俺だ、俺。

いや、詐欺じやねーからな。

まあ、今はぐだらなーことはおことこして。

今日から俺の過去について紹介していきたいと想つ。  
じゃあ、まずはシキとの出会いの前から。

では、どつね。

俺が来た時のここは、それはもうひどい有様だつた。  
一步外に出れば死体が転がつており、常に『ねつとり』した視線が  
まとわりついてくる。  
女性は大抵裸で転がつていて、もちろん息はしていなかつた。  
そこで俺は決心した。

「俺がここをかえて見せる!」

そこから、俺の奮闘記が始まつた。

~~~~~

まずははじめの1年はこの地区を占めた。

原作では海斗が占めたつてことになつていて、そんなのかんけーねえー。

とりあえず戦闘狂と極悪人と殺人衝動があるやつは片つ端から潰した。

残つてているのは、ここに来たばかりの人やか弱い女性ばかり。

まあ、例外も結構いるけど。

相馬とか相馬とか相馬とか・・・。

あ、相馬の奥さんは助けたよ？

どうやって？

そんなのどうでも良いじゃんか。結果よければすべてよし！

2年目でこの地区に新しい改革をもたらした。

それは『下沼グループ』設立である。建物は一週間で“俺”一人で建てた。

社員は禁止区域にいる人全員。

なんか知らんが「入れ」つていつたら、皆一いつ返事で了承してくれた。

まあ、ほとんどがリストラされたリーマンとか上司（つか、偉い人）の横暴に耐えられなくて逃げてきた人だ。

当然、仕事はできる。元研究者もいたから、研究もできる。

報酬は一日三回の食事と安心して眠れる寝床、少しの給料だ。

はじめはビクビクしていた社員の人たちも、このこう待遇にだんだん瞳に光を取り戻していった。

さつきも言つたが、もともと、仕事はできるので『下沼グループ』は瞬く間に成長。

今では日本5大企業のひとつとなつてゐる。

特に無茶な注文はしていないし、自分にあつたペースで進めさせて  
いるから、社員からの文句も少ない。あるとしたら、『もつと仕事  
くれ！』ってことぐらいだ。

ちなみに表の世界にも会社がある。

まあ、見かけだけの会社だがな。本社が裏にあるといふことを隠す  
ためだけに造つた。

あ、そうそう。なんか貯金がまた増えた。

なんかどんどん増えていつて怖いぜ。まあ、神からもらつたあの通  
帳とは別のところに保存しているがな。保存している銀行も『下沼  
グループ』だ。

3年目は禁止区域の清潔化。

これはかなり大変だつた。

まず、死体を一箇所に集めて焼いた。

手遅れかもしれないが、伝染病など、即死性のある病気にからな  
いためだ。

やつぱり、人を焼いた時には独特のにおいがあり、気分が悪くなつ  
た。

一緒にやつてる人の中で吐いている人もいたが、意地でも見届ける  
と顔に書いていたからそつとしておいた。

次に建物。

これはほとんどが使い物にならなかつた。

一番良いところでも、柱や壁にヒビが沢山入つていて。

めんどくさいので、全部ぶつ壊した。

あ、もちろん雅樹の家は別だぜ？

あそこは俺が建て直したから、そちらの建物とは一味・・・いや、

四味くらい違うぜ？（意味がわかりません）

これで今ここに残つてゐる建物が、

『下沼グループ本社・社員寮』・『雅樹と百合の家』

だけになつた。後々、海斗の家も建てるつもりだ。

・・・さすがにやり過ぎたと思つたが、まあ、大丈夫だろ？  
瓦礫の山は・・・とりあえずそのままにしておく。  
片付けんのめんどいし。

4年目～今現在（俺12歳）

今は主にここに流れ着いた人たちを勧誘（といひ名の脅し）をする  
ために散歩をしている。

今では、本社に勤めている人数が2000を超えた。

・・・ドンだけ横暴やつてんだ、表の野郎ども。

明らかに小学生以下の女の子がいた時はどうじょうかと思つたぜ。  
でも、偶に殺人犯とか混じつていてO・H・A・N・A・S・Iを  
している。

もちろん受けたやつは漏れなく超眞面目さんに大変身した。

今では、『下沼グループ』の大切な戦力だ。

え？

地下鉄のやつらどうした？

ああ、あいつらも俺の会社の一員だ。

元政治家のあの人（名前が出てこない）に俺がやつてることを話  
したら快く協力してくれた。

そん時、舞とか舞とか舞に襲われて（物理的に）、朱美とか朱美と  
か朱美に襲われた（性的に）。

で、朱美さんは妊娠したらしい。まあ、この話はまた後で。

そんな時、1組の親子（といつても親は母親だけ）を見つけた。

そしてその後からは下卑た笑みを浮かべた男たちが。

そんなことを考えてこりつむり、俺の体は勝手に動きだしていた。

シキとの出会い - 何話続くかわからなにからどうあべやかのー - (後書き)

はい、アンケート！

またアンケートですが答えてくれたらうれしいです！

すでに3作品連載している私ですが、ネタに詰まりました。

と、ということで新しく連載しようかなと思つています。

- 1、R A T M A N
- 2、これゾン
- 3、ハイスクールD X D
- 4、れでいXばと！
- 5、ファイアーエムブレム 烈火の剣
- 6、I S
- 7、オリジナル作品
- 8、その他の作品

お願いだから叩かないでね！  
文句も受け付けないぜ！

シキとの出会い - 何話続くかわからなからどうあればいいの? - (前書き)

久しぶり過ぎて 。。。。

シキとの出会い - 何話続くかわからないうからどうあればいいの？ -

Side・凌矢

「あぐ・・・。・・・はあはあはあはあはあ・・・」  
「はあはあはあ・・・お、お母さん・・・」

「ゲヘヘヘ！」

「もう鬼ごっこは終わりかい？ グフフフ」

「それじゃあもう頂いちゃいますか！ ブホホホ」

・・・ブホホホってなんだよ。

とか考へてる場合じやなかつた。

状況から見るに、あの親子がキモい3人衆（今命名）に追いかけられていらしい。

で、体力やらなにやら色々なものが切れた親子が瓦礫に足を取られて転んだ。

そして、キモい3人衆はあの親子を犯そうとしている。

・・・よし。

要更正者3人確認。

ターゲットロックオン。

スキル「魔王のO・H A・N A・S H I」発動。

・・・突撃！

「さてさて、お味のほどほおらしやぶべえええええええええええええ！」

「ア、アニキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

「だ、誰なのね！」

・・・メツチャ個性豊かだなこの三人衆。  
なんか漫才してるみたいだ。

「俺が誰か？・・・俺は下沼グループ総轄理事の下沼凌矢だ！」

・・・まともに会話してるのが一人しかいない。

俺のドロップキック喰らつてもまだ余裕そうだな。  
瓦礫に埋もれながら叫んでるし。

「お前ちょっと黙れ」ガスツ

卷之三

「し、下沼グループ

8年前、突如として発足した企業で、当初からその斬新なポリシーが売りの大企業。あらゆる部門で優秀な成績を残しており、客の受けも良好。さらに、宇宙開発に関しては右に出る企業はなく、世界でも3本の指に入るほど、影響力が高い。極めつけは、総轄理事の詳細不明。最初は一人ですべてのことをこなしており、かなりの天才ということしかわかつていない。それと、本社が何所にあるのか今もわかつていらないなどが多い企業。それが下沼企業」

・・・お前しょほんとスンナよ。男がそんなことしても、キモいだけだからな。

それと、そこの中。長々と説明ありがとうございました。

ט' ט' ט' ט'

キラン

飛んでいく個性豊かな芝居 3人衆

そしてそれを嘆然と見送る親子。

・・・うん、メッチャシユールな光景だ。  
まあ、こんなシユールな光景を生み出したのは俺だけだ。

さつきの三人衆は下沼グループの特殊戦闘部隊「AAG」が回収した。

なんか『木原神拳 常の型』なるものの達人らしい。

一度「しんのすけ！」といわせたときは、吹き出してしまった。

國語

「大丈夫か？」

「……まっ！……い、今のはなんだつたんでしょうか？」

・・・泣いた！

や、やばい！泣いた子供ほど大変なものはないぞ！

・・・でも、可愛いな・・・ハツ！

お、俺は口っこんじやないぞ！ただ泣き顔で上田遣いか可愛かつた  
だけで・・・ハツ！

・・・もつ考えるのやめよ！

「ほりほりシキちゃん、泣かないの」

「つっ・・・怖かったよお・・・」

「あらあら、どうしましょう」

「う」

といこながら、子供をあやすお母さん。

「とりあえず俺の会社に来るか？」

「あり？・・・迷子？」

「なんでやねんっ！」

「違うの？ぼく」

「あんたさつきの見てなかつたのか！？つか、なんでぼく？…」

「あらあら、突つ込みがお上手なぼくだ」と。下の方はどつなん  
じょうね？

「だからぼくじやなこ！？つか、優しそうな顔して何下ネタかまして  
んだよ！？」

「あらあら、あつち”的ことが通じるのね？さては・・・もう卒業  
した？」

「やつぱりかあ！・・・黙秘權を行使します」

「あらあらあら、モテモテね」

「おつが―――つ――」

はあはあはあ・・・。

やべえ・・・。この人メッチャ疲れる。

「・・・わうこえれば名前は？」

「あら~。そういえば言ってなかつたわね」

「忘れてたんかい」

「私の名前は空野星よ。気楽にセイウチんと呼んでね」の子は

「あらあらへ寝ねやせつけたわね・・・」の如きの如前は月よ。ナリの  
つま

「 ことも気軽に用ちゃん と呼んでね」

「ああ、それが、たがせ、たがせ！」

「惚れたら大変だぜ？・・・つと、俺の名前言つてなかつたな。俺

の名前は

卷之三

「んじゃ、どうあえず、俺の会社に行きましょうか？」

・・・疲れた。

シキとの会話 - 何話続くかわからなことからひとつあるべきもの - (後書き)

なんかシキの母さんが　～～

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5775t/>

---

マジチートって言うジゲン越えてる

2011年12月31日21時51分発行